第20号

実践女子大学

生活文化フォーラム

新たな知と価値の創造・発信のために

Ⅰ　生活文化フォーラム
シリーズ国際公開講演会「生活の中での心の動きと支援」

Ⅱ　公開市民講座
暮らしをとらえなおす「日野の保育と教育」

Ⅲ　生活心理学生の活動

実践女子大学　生活科学部生活文化学科　2016年3月

I

生活文化フォーラム

シリーズ国際公開講演会

生活の中での心の動きと支援

＊ 生活文化フォーラム　シリーズ国際公開講演会
シリーズ１：平成27年９月12日 開催
シリーズ２：平成27年９月14日 開催

シリーズ１

ソーシャルネットワークと人々の心と暮らし
── フィールドワークでの研究成果から ── …… 2
コーレン・アピセラ　ペンシルバニア大学心理学研究室 教授

シリーズ２

音楽をとおした自閉症児とのコミュニケーション
── 関係と感情を育むための発達アセスメントと支援ツール ── …… 22
カーリン・シューマッハー　ベルリン芸術大学・音楽療法センター 教授

シリーズ国際公開講演会

生活の中での心の動きと支援

生活心理専攻で企画した国際公開講演会では
アメリカとドイツから二名の研究者をゲストに迎えて
生活の中での心の動きのメカニズムの解明、心の支援について考察します。

国際公開講演会
シリーズ1

ソーシャルネットワークと人々の心と暮らし

――フィールドワークでの研究成果から――

ペンシルバニア大学心理学研究室　教授
コーレン・アピセラ

司会　生活心理専攻企画、国際公開講演会「生活の中での心の動きと支援」シリーズ一、「ソーシャルネットワークと人々の心と暮らし」ということで、アピセラ先生をお招きしての講演会をスタートさせたいと思います。

まず初めに、生活文化学科長の松田先生からごあいさつをお願

いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

松田　皆様、こんにちは。

一同　こんにちは。

松田　お忙しい中、本日、こうしてお運びいただきまして、大変ありがとうございます。関東地方では大雨の被害もまだ収束とはいえないなか、けさほどは大きな地震がありまして驚きました。皆様、大丈夫だったでしょうか。本日この時間にこうして皆様にお集まりいただけることを大変感謝したいと思います。

改めまして、実践女子大学国際公開講演会へようこそお越しいただきました。

私ども生活文化学科はこの春、誕生からちょうど二十年の節目を迎えました。そして、昨年、二〇一四年ですけれども、学科に幼児保育専攻と並んで新しく生活心理専攻ができました。この生まれたばかりの生活心理専攻では、皆様にその誕生を知っていただくために、そして皆様と有意義な学びを分かち合うことができるようにと、今回、「生活の中での心の動きと支援」と題して、シリーズで国際公開講演会を企画いたしました。

これまで学科として生活文化フォーラムを開催してまいりましたけれども、今回の生活心理専攻企画は特別です。シリーズで、しかも海外から気鋭の研究者をお招きしての講演会です。したがって、本日この講演会に参加された皆様はとてもラッキーな方々だと思います。

本日はシリーズの第一回目として、この日野キャンパスに、アメリカのペンシルバニア大学のコーレン・アピセラ博士をお招きしてご講演いただきます。後ほどご紹介があると思いますが、アピセラ先生はアフリカでのフィールドワークの研究成果をもとに、ソーシャルネットワークに関する研究でも著名な研究者でいらっしゃいます。グローバルに活躍されている先生のお話をこうしてこの日野の地で伺えるということは、本当に光栄なことですし、エキサイティングなことであります。そして、とてもラッキーなことだと思います。

それでは、これからご一緒に有意義な時間を楽しみたいと思います。最後までどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会　松田先生、ありがとうございました。

改めまして、司会を務めさせていただきます本学教員の細江です。

まず、アピセラ先生についてご紹介申し上げてから、講演をスタートさせていただきたいと思います。

アピセラ先生は、ハーバード大学の博士課程で自然人類学、それから進化心理学、社会心理学等の研究をなさって、博士号を取得されて、現在、ペンシルバニア大学でさまざまな研究をし、教えていらっしゃるということです。

皆様よくご存じかと思いますけれども、アピセラ先生はＮＨＫの『病の起源』というテレビ番組に出演なさっていて、私はその番組を見て、ぜひ本学に、学生のために、そして日野市の皆様のためにお招きしたいという、熱烈なインビテーショ

ンレターを送りました。先生に来ていただけることになりまして、私は非常に幸せだなと思っております。本日は最新の研究、そして学際的な研究をなさっているアピセラ先生のお話を伺えるということを、非常にありがたく思います。

ということで、簡単ではありますが、アピセラ先生のご紹介をさせていただいて、早速、講演会をスタートさせたいと思います。

アピセラ先生、よろしくお願いします。

アピセラ　皆さん、本日はどうもありがとうございます。今回、歴史ある実践女子大学でこのような機会を得て、皆さんの前で講演させていただくことができまして、大変うれしく思っております。

私は二〇一一年に初めて来日しました。今回また日本へ来る機会をいただき、本当にうれしく思います。昨晩日本に着きまして、今朝六時ちょっと前にウェークアップコールとなった大きな地震で起こされましたが、本日はとても楽しみにしております。

既に皆さんご存じかと思いますが、私はタンザニアのハッザ族と密接な関係を築いております。彼らは現存する数少ない狩猟採集民の一族でありまして、摂取カロリーの九五パーセントを、いまだに狩りや採集によって得る生活を営んでいます。彼らの社会性や協力行動を研究していて、その一端を皆さんにお話しさせていただくことで、人間がほかの動物とは一線を画し、人間であるがゆえの協力行動がどのように発展、進化を遂げてきたのかをひもとく一助になればと思っております。

まず、ハッザ族はどういった人たちで、研究対象としてどうして貴重な集団であるのかということについてお話ししていきたいと思います。

ハッザ族における協力行動の研究領域でどのように協力者同士がつながりを持っていくのか、というのが私の研究の一端でもありますが、その研究を通じて、ある疑問が生じてきました。協力行動をとる集団は果たして、類は友を呼ぶというように、類似性によって人と人とが結びついて集団を形成し、社会を形成していくのか、それとも、周囲の人と影響を与え合いながら、社会的誘導によって結びつくのか、というものです。

その疑問をひもといていく前に、まずハッザ族というのはどういった人々なのか、その生活について、彼らの社会組織、文化的・経済的な慣習、信仰などに焦点を当てて、私の知っている範囲で簡単にお話ししていこうと思っています。

ハッザ族というのは狩猟採集民で、タンザニアの北部のエヤシ湖の周辺で暮らしています。一〇〇〇人ほどがハッザ族として認識、特定されていますが、いまも狩猟採集を主な生活の手段としているのは、そのうちのわずか三〇〇～四〇〇人程度です。私の研究対象はまさにその三〇〇人、四〇〇人の集団になります。

ハッザ族は、キャンプと呼ばれる三十人程度の小さなグルー

プ単位で生活しています。その規模は、季節によって大きくなったり、小さくなったり、グループが分裂したり、グループとグループが一緒にくっついたりと、融合や分離を繰り返している集団です。

民族誌学の記録によりますと、ハッザ族というのは特定の居住場所を持たず、狩猟採集を行いながら、いろいろなところに移動して暮らします。また、妻の家族と暮らす、夫の家族と暮らす、あるいはどちらの家族とも暮らさないこともある、といった融通性、柔軟性のある社会集団になっています。

そして、ほかの狩猟採集民の社会と同じように、ハッザ族にも性別の分業があります。男性はキリンやシマウマなどあらゆる動物の狩りをしますし、女性は食物、ベリーの実を集めたり、木の実を集めたりという採集の生活を営んでいます。

彼らは生涯にわたってこれを続けていくわけです。どこかで引退すると思われるかもしれませんけれども、例えば男性の狩りでしたら、四十～五十代ぐらいにかけて習熟度が高くなるということですし、高齢男性の死亡原因で一番多いのは、高い木に登って蜂の巣をとっているときに木から落ちて死亡する、というものです。

ハッザ族の社会は平等主義であり、明確な身分の階層というのはなくて、単に狩りがうまいとか、年上だとか、そういった理由で他者よりも権力があるといったことはありません。ただ、年長者や狩りの名手だと、より多くの尊敬を集めるといったことはあります。

ハッザ族の経済ですけれども、平等主義ですので、キャンプで獲得した食物のほとんど全てが、キャンプのメンバーに、ほぼ公平に分配されます。

多くの人類学者は、ハッザ族は宗教を持たず、最小限の宗教もどきのものしかないと語っています。民族誌学の記述では、ハッザ族は宗教的な構造や、宗教指導者、宗教的な儀式も一切なくて、死後の世界すら信仰しないといわれています。ただし、ハッザ族は独自の宇宙論的な考えを持つともいわれていまして、ショーコといわれる女性の太陽神がいて、太陽を女性と見立てています。月は男性で、セタと呼ばれています。太陽と月の子どもが星たちです。そういった太陽神のショーコや、ヘイニーといわれる神を信仰している一部のハッザ族もいます。お時間の関係で細かいところまでは説明できませんが、ハッザ族の宗教信仰について私が行った体系的な研究を、興味をもたれた方とぜひ共有できればと思っています。

パイチャートがこちらに出ていますが、ハッザ族にヘイニーやショーコを信じますかと質問したところ、七五パーセントがイエスと答えて、二五パーセントが信じないと答えました。ショーコについても聞くと、四〇パーセントの人は信じない、知らない。更に聞いてみると、信じているという人の中でも、ショーコとセタというのが太陽と月の神様だというその違いすらもわからなくて、同じだと思っていたとか、神的な特別な能力が備わっているというのは知らなかったとか、そのあたりのことは信じていないとか、いろいろな人がいろいろな考えを

持っているということがわかります。

ヘイニーという非常に力強い神を信じると言った人の中でも、死後の世界で神様がよい方向に導いてくれるとか、そういった特別な力までは信じていないとか、そういった力が備わっているという説があるということも知らなかったとか、いろいろな考え方を持っていました。

では、地球や人間はどのようにこの世に生まれてきたのかという、信仰心に絡めた質問をしてみると、ほとんどの人からは、知らないという答えが返ってきました。祖先のみぞ知ると言ったり、またはヘイニーの神様がつくったのではないかと言う人もいます。ここにキリンの絵が描いてありますけれども、キリンの長い首のところから、天から人が首を伝っておりてきたとか、バオバブの木を使って人間が天からおりてきたというような、伝説のような話を信じている人もいました。そういった生起、創造について知らないと言う人もたくさんいました。

死後どういったことが起こるかという質問をすると、多くの人は、知らないとか、考えたことすらないと答えました。更に聞いても、死んだら泣いてしまうとか、地面の中に埋められるとか、比較的現実的な答えが返ってきました。

それでは、なぜハッザ族を対象に研究を行うかということですが、心理学や社会科学の分野では、一般的に欧米では、WEIRD（Western, Educated, Industrialized, Rich and Democratic Societies）だけを対象に研究を行って、そこから結論づけていろいろな学説を導き出しています。しかしこういった方法に対しては心理学の幾つかの分野、特に心理学の本質を説明するような、何か進化的な説明を導き出すような分野では、その方法に対する批判が多くされます。異文化を扱って、人が備え持つ多様性や行動、人間の性質を明らかにするという意味で、ハッザ族は非常に適切な研究対象でした。

もう一つ、ハッザ族が研究対象として魅力的だった理由は、現代社会とは違う生活を営んで、彼らの生活様式が多様な進化を遂げてきたというところです。地球上に人類が誕生して以来、ほとんどの期間、狩猟採集の生活を続けてきたわけです。そういった狩猟採集民の生活様式の中で人間特有のいろいろな再生や生存を五万世代分、繰り返してきたわけです。私たちの社会よりも祖先が営んできた社会に近いという意味で、ハッザ族は研究対象として適していたということです。

またメディアなどからかなり隔絶されていますので、普遍性の検証を行うにも適した存在だと思います。

更に、最先端医療といったものからも隔絶されていて、バースコントロールもしていませんし、自然分娩で生殖活動を行い、栄えてきたということです。ダーウィン的な適者かどうかといった検証を行うにも最適ですし、人間がどのような好みや行動パターンを持っているか、どういった人を魅力的と感じるか、何かシグナルがあるのではないか、といった研究の興味深い対象でもあります。

ハッザ族がいかに研究対象として魅力的かということをお話ししたわけですが、では、なぜ社会性と協力行動について研

究するのでしょうか。大きな社会になりますと、どうしても労力を払わないで、誰かが一生懸命頑張っているものにただ乗りしてしまうといった問題が生じます。それをどのように解決するかというのが社会の大きなテーマ、課題でもあるわけです。この絵（図1）に示すように、一人だけが自転車を一生懸命こいでいて、楽をしている人がいるとか、一人が税金を払ってばかりいるとか、大きな社会ではそういった問題があります。小さな社会だとそういった問題はないのではないか、協力上の問題はないのではないかと言う人もいますが、実際には小さな社会でも協力上の困難な課題はあると私は反論したいと思います。

小さな集団でも、ただ乗りの機会はたくさんあります。みんなが一生懸命仕事をしているのに楽をして、ただ乗りをする、例えば、男性が狩りに出かけている間に、キャンプに残っている女性がぶらぶら遊んでほかのキャンプに行ったりしても、別に誰かがモニターしているわけではありません。本当はキャンプで獲得した食べ物は全員に平等に分配しなければいけないのに、誰かがスカートの下に隠していたり。

それについておもしろいエピソードがあります。私の知り合いの人類学者でフランク・マーロウという人がいますが、彼がハッザ族と一緒にいるときに、ハッザ族の男性から、「人が来たから、大好物の蜂蜜をマーロウ氏が乗っているランドローバーの下に隠してくれないか」と頼まれたりしたことがあったそうです。

図1

行動を制御したり、コントロールするような正式な制度や、集中管理の制度もないですし、法律や警察、悪い人を罰するといったメカニズム、仕組みがないわけです。

そういった、ただ乗りをしている、ずるをしたりする人がいると、それを見ていたサードパーティー、第三者が制裁や罰を与えるということがあるわけですが、ハッザ族ではそういった第三者が重い罰を与えるというようなことは、なくはないものの、第三者による比較的軽い制裁ということになります。

また、神様を信じていると、「悪いことをすると神様が見ていて罰を与えられるから、いい子にしよう」といった考えが働くわけですけれども、先ほど言ったように宗教自体がないので、神様もあまり信じていないということで、そういったことから生じる問題もあります。

同じ集団の中にいると、悪さをしたり、ずるをすると周りの目が気になります。ハッザ族というのは、移動したり、キャンプから抜けたり、メンバーが替わったりというのを繰り返していますので、そういった不名誉を受けるという感覚もあまりなく、ほかのキャンプに行って逃げてしまったりといったこともあります。

ハッザ族もそういったずるをするということは多々あります。例えば、コインを三十枚渡し、さいころを振って出た目と同じ枚数のコインを自分と相手のそれぞれのカップへ分配してください、というゲームをします。普通は、さいころというのはちゃんと確率があって、目が平等に、ランダムに出て、確率的には同じになるので、カップの中のコインは、自分には十五枚、相手にも十五枚という形になるわけです。ですが、右側のグラフをごらんいただくとわかると思いますが、赤い棒グラフが自分に入れたコインの数で、相手のほうが青で、自分に入れるのがどうしても多くなってしまう。さいころ自体の確率の均一性ということ自体、信じていない。あてにしていない。三十枚全部を自分のカップに入れたりする人もいました。

とはいえ、いろいろなことがあるにもかかわらず、人間は協力行動をとるというすばらしい面を持っています。

私たち人間が、驚くべき生物学的成功を享受して、進化を遂げてきたことは否定できない事実ですし、過去一万年の間、つまり農業が出現して以来、人口は一〇〇〇倍以上に膨れ上がっています。人は非常に過酷なさまざまな環境、恐らく南極以外ではとても寒いところや過酷な気候状況でも、地球上のいろいろなところに住むようになりました。

こちら（図2）は、いかに厳しい環境で人間が居住して暮らしているかを示しています。これは私が生まれた年に故郷で撮られた写真（図3）ですが、このように雪が積もっている寒いところです。そういった厳しい環境で生き延びるというだけでなく、そこで繁栄することさえできたのは、人がこういった厳しい環境の中で皆で大がかりに協力していくといった行動をとることができたから、そういった人間のすばらしい能力を備えていたから、こういったいろいろなところに住んで繁栄してきたわけです。

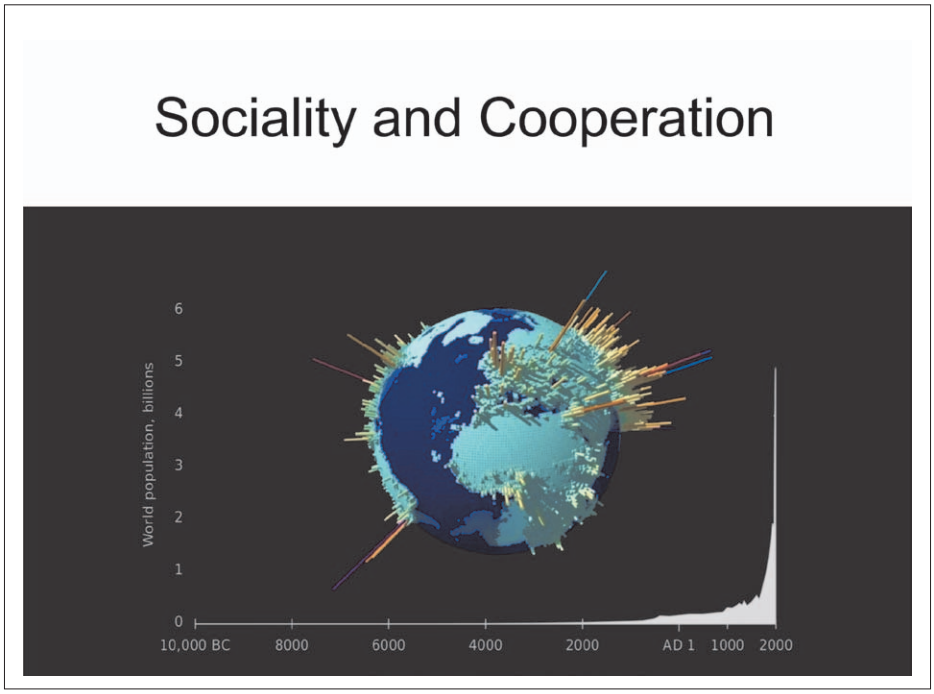

Sociality and Cooperation
World population, billions
6
5
4
3
2
1
0
10,000 BC
8000
6000
4000
2000
AD 1
1000
2000

図2

Sociality and Cooperation

図3

人間はそういった見事な、秩序の整った社会の形をつくり上げてきました。私たちは家族というグループが集まって国家という大きな集団をつくり、その中で暮らしています。その集団や社会の中で協力行動を行いながら生活をしていて、血縁の枠を超えて他人にもその協力行為が及ぶときもありますし、困っている人を助け、そのために労力を惜しまない。まさに二〇一一年の震災のときに日本の方々は、自分のことよりも他人を助けるといった協力行動により、さまざまな思いやりの行為を見せてくれました。

それだけでなく人は、血縁者ではない個体とも長期的に持続的な関係、きずなを築くことができます。私たちはこうしたきずなを友情と呼びますが、その友情自体、とてもすばらしいことです。まさにこれがほかの動物と人間を画するもので、動物で人間に匹敵するようなスケールでの友情を持っているものは見受けられません。皆さんも実践女子大学で学んでいる間に、末永い生涯の友達を見つけることができるでしょう。そして、それは大学を卒業して遠く離れて十年、二十年、会わなくても、生涯の友となり得るということです。

人間がどのように、人間の主たるゆえんのそういった協力行動を進化させてきたかということを、少しひもといていきたいと思います。

生物学者のE・O・ウィルソンは、「人の社会性の進化は、あらゆる生物学の最大のなぞである」と表現しています。ですから、簡単に答えられるような問いではないということです。

人の社会性というのは、協力行動の進化について、特に決まった仕組みやメカニズムが存在していないにもかかわらず、常に離反者に有利に働く、自然選択という進化論上の仕組みといった特異な点も、精巧なだけでなく神秘的ななぞとして残っています。

ウィルソンが三十五年ぐらい前に指摘して以来、私たち学者は長い間、協力行動を理解しようとしてきて、こんな社会性の仕組みがあるからではないかというようないろいろな学説が出てきたわけです。この二時間の中ではそれを全部説明する時間はありませんが、いろいろな学説がある中で、社会性、協力者同士がつながって集団を形成していくということが、一つの共通項として見出されています。

一つめに提唱されている仕組みは、ハミルトン氏が提唱した「血縁選択」というものです。血縁関係があると協力行動をとる、自分と同じ遺伝子を持つ人たちを血縁によって助けるという説です。協力行動は供与者の適応度を高めることによって進化することが可能です。この公式（図4）が意味しているものは、協力行動の供与者は、協力行為を供与することによって「犠牲」を払ったり「コスト」がかかっている。それと、協力の受け手の「行為によって受ける利益」に、「供与者と受け手が遺伝的にどれぐらい近いか」という関連性を掛けた値よりも、「犠牲を払うコスト」のほうが小さい場合は、協力行動が発展して進化していくという公式です。

この式の「r」というのは、実際には単に社会の構造の尺度

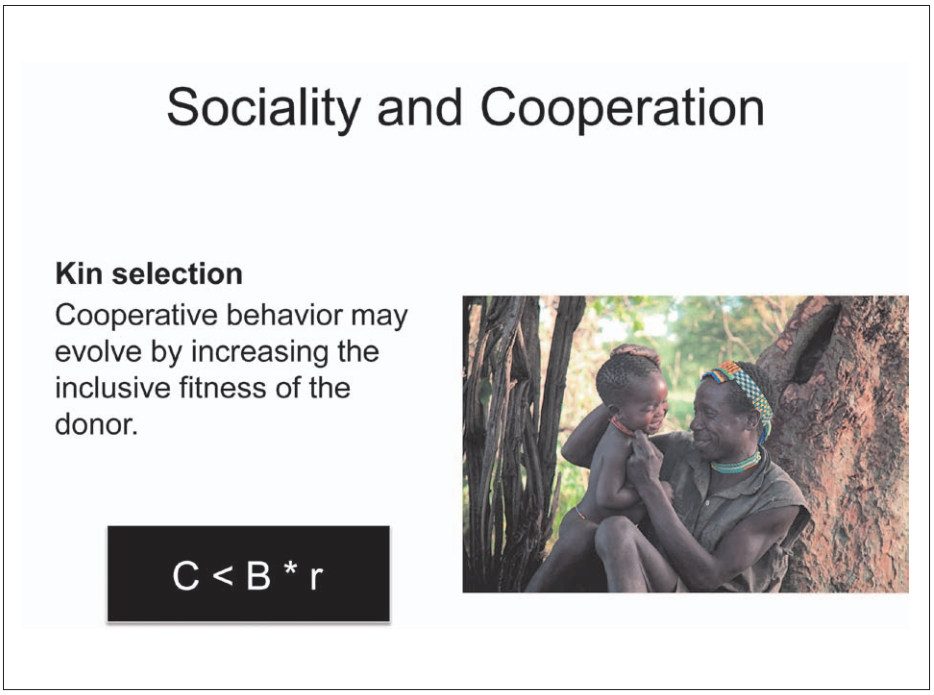


図4

であって、その幅は〇パーセントから五〇パーセント近くあるということです。〇パーセントというのは、人々の交流がほとんどない、他人同士の場合もあれば、五〇パーセント、つまり、ほとんどが血縁者同士の交流ややりとりがあるものまで、さまざまな形が社会構造にはあるということです。

次の協力行動の一つとして、「互恵性」があります。これは本当に簡単なもので、皆さんが他人のために何かをしたら、受け手である他人がそのお返しをしてくれるというものです。

そういった仕組みでは、協力行動を発展させるには、協力者が協力者を探していく、それには同じ社会空間で何度も同じ人と会う必要があります。

こちらは「グループ選択」を説明しているものです。協力者同士のグループというのは、あまり協力を好まない異端児の集まりのようなグループよりも、達成度が高いことを示しています。

この「グループ選択」というのは必ずしも遺伝的なものだけではなく、文化的にそういったグループ選択を行うこともちろんあります。協力行動ではそういった遺伝子が固定していくということを待つ必要もなく、いろいろな形で文化的な影響を受けたり、さまざまな影響を受けて作用し合いながら発展し、進化していくということが可能です。

こういった協力行動の進化の仕組みには、ある前提が存在します。それはポジティブアソートメントということ、つまりポジティブな形でのアソートメント、取り合わせということです。

もしも協力者が自分のかかわり合う相手から十分な支援を得られないということであれば、協力行動は拡散しないし、逆に相手が協力し合えると思えばそれが発展していくということで、協力者同士が相手の協力者を探して集まっていくということです。

社会的なネットワークの意味合いの中で、そういった協力行動の研究をしていて、先ほどいろいろと説明してきたような、人間と人間が集まってきて集団を形成して社会を形成するということは、類は友を呼ぶ的な、同じ種類や同じタイプのものが集まってくるのか、血縁によって強い結びつきを感じるのか、あるいは互恵性ということもお話ししましたが、互恵性で相手に何かをしたら、何かをし返してくれるような、そういった協力関係を持つ人同士で影響し合いながら社会を形成していくのか、といったようないろいろな疑問があります。

ハッザ族の、狩猟採集民の社会性と協力行動をテーマに考えて、社会的ネットワークに照らして協力行動を研究してきました。

こちら（図5）に彼らが住んでいる湖がありますが、四〇〇〇平方キロぐらいの土地を車で走り回って、見つけられる全てのハッザ族を探し出して調査を行いました。

十七に及ぶキャンプを訪ねて、お会いした全ての大人からお話を聞きました。

こちら（図6）はごく一部ですが、過去十年間にわたって会った人たちを写真撮影して、写真のデータベースをつくったものです。フェイスブックみたいに見えますが、名前だけではなくてちゃんと写真も照らし合わせてデータベース化して、間違いが起こらないようにこういった工夫もしています。

人はどのように、一緒に住みたい、集団を形成したい相手を選ぶのかというのを調査するため、この写真のデータベースを使って、とりあえず二セット、ポスターをつくりました。一セットには男性だけ、もう一セットには女性だけが載っているポスターで、女性は女性を、男性は男性を選ぶという形で同性のネットワークに焦点を当てて研究しました。

写真を使って選んだ人の名前を挙げてもらうための質問の仕方には神経を使いました。例えば「あなたにとっての親友は誰ですか」と聞いてしまうと、友達だから血縁者ではないということで、血縁者が大事な人であっても親友からは除外してしまいます。そういったこともあって、「次にキャンプを移動するとしたら誰と一緒に暮らしたいですか」というような質問がいいのではないかといろいろ工夫しながら質問をして、名前を挙げてもらいました。彼らにとっては、限りある食べ物を平等に分配していくうえで、選ぶ相手によって消費カロリーや、そういったものが影響を受けますから、一緒に暮らす人というのは非常に重要なわけです。自分にとって重要な人のことをキャンプメートネットワークと呼びました。

キャンプの中で、またはキャンプの外でも、女性は女性、男性は男性を十人まで選んで名前を挙げてもらって、社会的ネットワークがどのように形成されるかを研究しました。

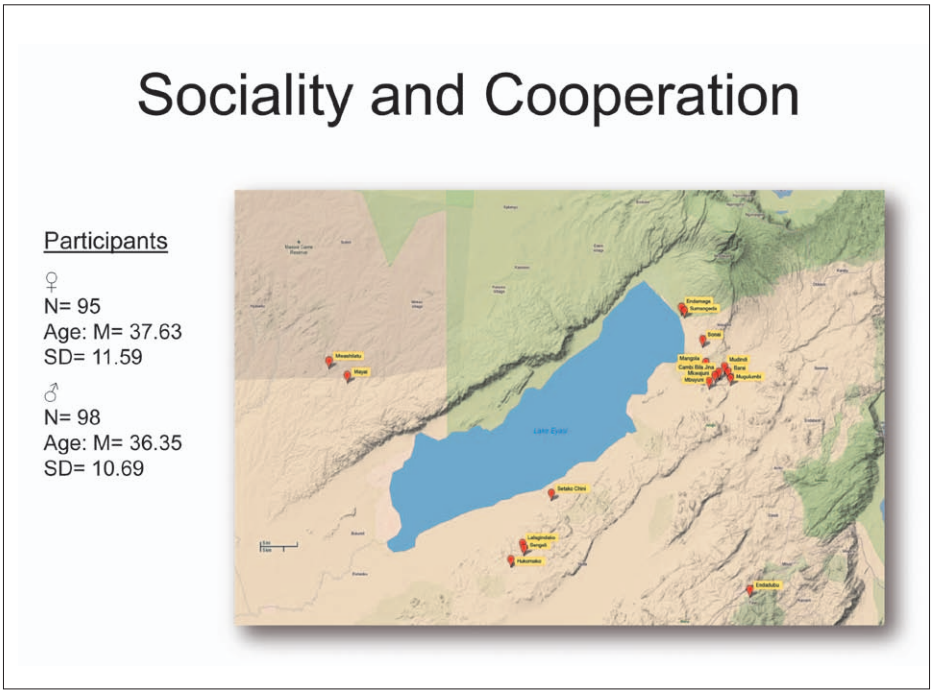

Sociality and Cooperation
Participants
♀
N= 95
Age: M= 37.63
SD= 11.59
♂
N= 98
Age: M= 36.35
SD= 10.69

図5

Sociality and Cooperation
hadzabook

図6

名前を挙げてもらったら、まず選んだ人が友人なのか、血縁者なのかを聞いて、血縁者の場合はどういった関係性にあるのかというのを聞いたりして、そのネットワークの間でのいろいろな関係性、どれだけ近い血縁かという係数も計算しました。それも加味して、例えば家系をベースにした個体間だったら遺伝子で類似度がどれくらいあるとか、そういったことを分析していきました。

もう一つ、さきほどのマーロウ氏がおもしろいゲームをしました。やはり彼らの社会性や協力行動を図るゲームです。

協力行動をはかるために、ハッザ族の好物である蜂蜜棒を四本ずつ配って、真ん中に公共財を入れるポットを置きました。自分の持ち分の四本のうちから、もしも一本を公共財としてポットの中へ寄附したら、三本の蜂蜜棒を公共財として追加であげますという形です。

そういった「公共に寄附する」という行動はなかなか難しいのではないかと思いました。今回こういった公共財のゲームをやるのは初めてでした。蜂蜜棒をいっぱい詰め込んだ重たいスーツケースを運んで、テストをしてみました。

実際には思ったより多く、半分以上の人が公共財のポットの中に寄附をしたということで、性別で差は見られませんでした。

先ほど、同性を選んでもらってネットワークをつくる、という話をしましたが、これは女性のネットワークのテストの結果でつくった、彼らのキャンプメートのネットワークの全体図を示しています。円形のものはノードと呼んでいて、それぞれの個体、個人を示しています。所属するキャンプによって色を分けています。

この矢印は、誰が誰を指名したかという関係の方向性を示しています。

色分けしてありますが、紫は友人関係を示していて、緑は血縁関係を示しています。

これを見ると、赤の固まりができていたり、いろいろな色の固まりができています。それはキャンプの固まりができているということです。同じキャンプは同じ色にしてありますので、同じ色が固まっているということは、キャンプの中の人の名前を挙げているということ、つまり同じキャンプの人と次も一緒に住みたいということで、これはとてもいいことです。いま一緒に暮らしたい人たちと暮らしているということになります。

近接性というのは、影響はそれほど大きくはないかもしれませんが、非常に重要な要素です。ほかの個体との社会的つながりを形成する確率は、相手との距離が遠くなればなるほど低下していくということです。人が近代的・社会的ネットワークの中で、地理的に離れるとだんだん疎遠になっていく、ということもありましたので、それとまさに同じことです。マイスペースのようなソーシャルネットワーキングサイトからのデータでも同様のパターンが見られると思います。

遺伝的な関連性というのもやはり重要です。一緒に住みた

いと思うのは、選んだ個体同士の関係性が遺伝的に近いと、両者が社会的につながる確率が高まるということも示されています。

女性と男性のネットワークを、青が女性、赤が男性で示しました。

時間の関係であまり深くは説明しませんが、緑はギフトネットワークというもので、他人に自分の大事な蜂蜜などをあげる、関連性が高い人に対してそういった贈り物をするというのは、特に驚くべきことではないと思います。

互恵性というのも非常に重要な要素で、ハッザ族の社会的ネットワークでは、互恵性は非常に強くなっています。それは、先ほどのテスト結果で、同じキャンプで暮らしている人の名前をキャンプメートとして挙げる割合が四五パーセントを占めている、ということからも推察されます。

先ほど言ったギフトネットワークについては今回、深く説明はしませんが、匿名で誰かにギフトをあげると、あげた人から互恵的な形で、もらったからあげるというような関係性、互恵性が強く深まっていくことになります。

この研究を実証するまで、キャンプ内では狩猟採集をし、食物を広く分配するわけですから、寛容な人に人気があるのではないかという仮説を立てました。

しかし、残念ながら結果はそうはなりませんでした。寛容な人の名前が多く挙がるというわけではなかったのです。公共財に寄附をする量が増加するのにあわせて、社会的につながる確率がふえるということを示していて、寛容な人が社会的なつながりを強めるというわけではなくて、同じようなレベルの行為をする、同じようなレベルで公共財を寄附した人同士がよりつながる可能性が高くなるということがわかりました。

蜂蜜棒をどれぐらい寄附するかという寄附の量の類似度が二つの個体の間で一単位増加するごとに、社会的につながる確率は二五～三〇パーセントぐらい上昇します。

ですから、同じような寄附のレベルの者同士や、同じような協力度の者同士は、社会的につながる確率が増してきます。

二者関係ではなくても、キャンプそのものの内部に同類性があるかどうかを確認したかったわけです。理由としては、協力行動を説明する進化モデルの重要な要素として、グループ内よりも、グループ間の協力行動のほうが相対的にばらつき度が高いのではないかという仮説があったからです。検証して、十七に及ぶハッザ族のキャンプで蜂蜜棒を寄附するといった差異やばらつきを、集団の構造を固定した場合で得られる差異と、ランダムな形とで比較対照を行って、一〇〇〇回ぐらいシミュレーションをして、どのような差異が生じるか、ばらつきが生じるかを調査しました。無作為での偶然の結果と比べると、協力行動に関してはキャンプ間の差異はほぼ二〇パーセント以上あって、キャンプ内の差異、ばらつきは少なかったということです。キャンプ内のほうが同類性が高くて、違うキャンプ同士だと同類性の差異がより大きくなりました。

二者の協力行動における類似性が見えてきましたが、協力行動における類似性にはどういった要因が考えられるのか。要因として三つ考えられると思います。

一つは、同じような環境で育ってきたため、環境要因によって協力行動でも同じような類似性が見られるということです。

具体例でいいますと、例えば友達同士がいて両方が太っている。何で太っているのかというと、もしかしたら二人でいつも一緒に行動し、いろいろなものをたくさん食べてしまうからかもしれないし、近くにマクドナルドがあるから、そういったカロリーの高いものを食べてばかりいて太るのかもしれない。

ですから、一番最初の物理的な環境要因ということで、地理的な近接性によって同類性や近似性が生まれてくると考えられます。

二つめは、shared genes、遺伝子を共有しているということです。血縁関係があると、どうしても協力行動において同じような行動をとるということです。

もしかしたら、血縁だからということで協力行動において同じような類似性を示しているのではないかもしれません。それは一番最後の社会的なネットワーク、社会的な近接性ということです。私がある行為をしたら、その行為が周囲に影響を与え、社会がその影響を受けて同じような行為をする。親切にしたら親切にしてくれるという話もあると思います。

社会的な近接性、近似性ということで、協力行動において同類的な行動をとる。それは例えば、友人同士でもあり得るでしょうし、友達の友達、共通の友達がいるというようなことでも、社会的な影響を与え合って行動が似てくるということがあるかもしれません。

そういった近接性、近似性によって協力行動における類似度がある程度予測できるということがわかってきました。

近接性の測定項目を含めてしまうと、地理的な近接性の重要性が消えてしまいます。遺伝的につながっていたり、キャンプで同居するといった重要なことと同じように、社会的近接というのは重要な要素になります。

そういった協力行動における類似性というのは、遺伝的な血縁関係や環境要因だけでなく、相互に社会的なネットワーク、つまり相互に影響し合う人たちが組み合わされることによって、協力行動の同類性が生まれてくるということもわかってきました。

今回の研究によって、ハッザ族の社会的ネットワークキャンプというのは、協力行動の進化と特に矛盾しない形で構築されているということが見えてきました。協力者同士の二者間のレベルであっても、もう少し大きい三十人ぐらいのキャンプというレベルでも、協力者は、ほかの協力者とつながりを持つ傾向が見られます。

では、なぜ協力度で似通った行動をとる人たちが一緒に住んで、そういったキャンプを構成するのでしょうか。

一つは、homophilyということです。協力者は好んで他者と

つながりを持つということで、何らかの同類だと感じて相手を選ぶということです。「類は友を呼ぶ」というような感覚で集まってきます。英語にも「同じ羽毛の鳥は一カ所に集まる」ということわざがあります。

または、social induction、すなわち、社会的にお互いが影響し合い、親切にしてもらって、その親切が広まり、社会自体がhomogeneous、同質化していく、というのがその例になります。

社会を形成していくうえで、例えば親切にしたら、すぐにではないかもしれないですが、将来的に、覚えていてくれて親切にしてくれるというような社会的な影響を与え合って、社会的にそれが伝染していくということです。

このハッザ族の協力行動については、いろいろな年で同じような検証テストを行いました。複数年にかけてトラッキングをしていったわけです。どのように彼らが協力行動を展開させていくか、そしてどのようにキャンプを組みかえたりしていくのかを調査、追跡していきました。

二〇一〇年、一三年、一四年とそれぞれ個体を追跡調査しています。蜂蜜の調査ですが、どれだけ公共財を寄附する精神があるかというのは、特に地理的に固まっているというわけでもなく、年度や地理的な影響は特に受けていないということがわかりました。

では、いったい何が影響しているのだろうかと考えたとき、おもしろい傾向がみられることに気がつきました。毎年いろいろキャンプの構成人員はかわっているにもかかわらず、cooperator、協力者は同じ協力者と一緒に住み、離反者のような人は離反者と一緒に住むというような傾向が見られたのです。

数年にわたって協力度のレベルを調査しましたが、それは毎年同じように安定して出てくるわけではなく、年度によってばらつきがありました。

ある年には協力的な態度を示していた人が、次の年にはあまり協力的でなくなったりすることもありますし、逆にあまり協力的ではなかった人が協力的になったりということもありました。

年度でも特に共通項目が見えてこなかったので、何が一番強い予測因子かと思ったときに、お互いに一緒に住んでいる周りの人から影響を受けるという傾向が見えてきました。

それぞれ異なるデータを三年間分プロッティングしました。縦軸は、その個体がどれぐらい公共財に蜂蜜棒を寄附したかというもので、横軸は、その人が所属するキャンプでどれだけ蜂蜜棒を公共財に寄附したかというものの平均値をとらえました。これにより、キャンプでの貢献度が高ければ、個人の貢献度も高いということが見えてきました。

周りの協力や貢献のレベルによって影響を受けるということです。

こちらがそのデータをまとめたものです。例えば性別、年齢、結婚しているか、独身か、そういった予測因子を並べて調査しましたが、違う年と共通しているというものは特に見出せなく

て、唯一、キャンプの平均値、キャンプでの要因が周りから影響を受けるというのが、どの年であっても一番高い数値が出てきたのです。

協力行動の進化、発展を説明するさまざまなメカニズムが学者から提唱されていますが、それらに共通する一つの基本前提というのは、社会空間において協力者同士が集団をなすという必要性があるということです。三年間の研究をしてきて、そういったことも実際に検証結果としてわかってきました。

ハッザ族のように居住地が頻繁に変わるような人たちであっても、協力者は協力者と引き続き住み続けているということが見受けられます。

先ほど「類は友を呼ぶ」と言いましたが、同じ羽毛の人、同類項を持つような人、いわゆる同じタイプの人がつながり合うという一つの考え方についてお話ししました。それは先ほどの蜂蜜棒で示したように、今年は協力的だったけれども、翌年は協力的でなくなったり、その反対もあるというような形で、そういった同類項、同類のタイプだからというのは協力行動の進化の説明の要因としては弱いということです。

では、いかに協力的かをはかるうえで、なにが強い予測因子なのかというと、やはり、協力的な人に囲まれているという条件であるということが、先ほどの蜂蜜棒の検証でもわかってきました。

この結果は、人間の協力行動には順応性があって、相互作用する、他人にも自分にも影響される、ということを示しています。

ハッザ族に限っていえば、私たちの祖先もやはりそういった狩猟採集を行っていて、同じような行動、社会様式を営んできたという意味では、私たちが協力行動においてどのように進化・発展を遂げてきたかというモデルの理解に役立つと思います。そういった社会的影響、協力行動が重要だったということも見えてきます。

お時間となってしまいましたが、お伝えしたかったことは、ハッザ族のような小さな社会であっても、私たち人間がどういった説に基づいて行動をしているのか、社会を形成しているのかというなぞをひもとく鍵になるということです。心理学や社会科学全般の研究においても、多くの貴重な情報を提供してくれています。

本日は情報を詰め込み過ぎるぐらい、さまざまな情報をこれまでの研究をもとに共有させていただきました。

そういった細かい情報まで全て覚えなくて結構です。ただ、ぜひ覚えていただきたいのは、私たち人間は、もしかしたらその価値を十分認識していないまま、無意識のうちかもしれませんが、人と人はお互いがつながり合っていて、お互いが影響をし合っている、ということを覚えておいていただきたいと思います。

これはとてもすばらしいことです。私たちの行為や行動が、もしかしたら私たち自身よりも長く半永久的に生き続けて、誰かによい効果をもたらしているかもしれないのです。

最後に私からのアドバイスといたしましては、本日この講義が終了して教室を出たら、ぜひ皆さん、誰かのために何かよいことや親切なことをしていきましょう。気づかないところで相手の心に何かが残るかもしれません。

皆さん、長い時間辛抱強く聞いていただきまして、本当にありがとうございます。最後に私の研究に欠かせない協力者をご紹介したいと思います。フランクさん、ニコラスさん、ジェームズさんといったcollaborator、協力者や、research assistant、仕事の面だけでなくいろいろと厳しい局面でも頼りになって支えてくれた私のパートナーたちに感謝したいと思いますし、何より最も感謝しなければいけないのは、ハッザ族の人たちです。

以上で私の講演は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。最後に、何かご質問がありましたら、遠慮なくおっしゃってください。

司会　アピセラ先生、本当にありがとうございました。（拍手）

時間が押しておりますが、何でも結構ですので質問をお願いいたします。

参加者　ハッザ族は小さなグループが何カ所かに分かれているそうですが、彼らの中で、人のうわさ話というのは広がらないのですか。会ったことがないけれども、評判が伝わっているということはあるのですか。

アピセラ　やはり人の目や評価というのは重要です。彼らのキャンプ、社会において、それがどれぐらい遠くまで及ぶかというのは、私もそこまで深く研究していないのでわかりません。ただ、ある程度、彼らも人の目を気にしたりはしています。全く気にしないわけではないということです。

私たちは社会的な動物ですので、自分の属する社会の中で、人の目や評判を気にします。例えば、大学でも会社でもいいですが、給湯室でコーヒーを、誰でも飲めるけれども、一応一ドルを――百円でもいいですが、ポットに入れるという形にしておくと、誰も見ていないからと、ただでコーヒーを飲んでしまう人もいると思います。ところが、お金を入れるポットにお花の写真などを貼っておくと目を引くので、それだけでみんな真面目に入れる。やはりそれは人の目を気にして、きちんとしなければいけないと自分の行動を律する、ということもあり、やはり人の目や評価というのは人間の社会では気になります。

ハッザ族では、うわさとか、評判とか、評価とか、そういうのは全く気にしないわけではありません。ただ、まだ調査はしてはいません。

また、ハッザ族の中でも同じ名前の人たちがいますが、評判とか、そういうのを気にしてか、名前を変えたりする人も中にはいます。どこまで関連性があるかわかりませんが。

でも、とてもいい質問だと思います。ありがとうございます。ほかに何かありますでしょうか。

司会　あと三、四分ぐらいしかありませんが、質問はないでしょうか。

参加者　Thank you very much for your interesting talk. I have some questions.

アピセラ　Sure.

参加者　まず、ハッザ族は幾つかのグループに分かれて住んでいらっしゃるということですが、グループごとにリーダーみたいな方がいるのかどうかをお聞きしたくて。もしリーダーがいるとしたら、その人の価値観みたいなものにいろいろな判断が影響されていないのかというのを伺いたいのですが。

アピセラ　講演の中でも申し上げましたが、ハッザ族には、特に階層社会とか、どちらが上だからとか、狩りがうまいからこの人はこの人より上だというような権力があるとか、そういったものはありません。ただ、狩りの名人だと尊敬されたりはするということです。

とてもいい質問だと思います。そういった上下関係は彼らの小さな集団の中ではありませんが、いままさに分析している、調査をしているのが、各キャンプで一番年上の人が尊敬を集めるかとか、一番人気があるのはどの人かとか、一番の狩りの名人は誰かとか、みんなが同じ人を指すかといったことを調査しています。まだ結果は出ていませんが。

参加者　ありがとうございます。

もう一つですが、顔の類似性、見た目の身体的な類似性みたいなものが、協力行動やそのほかの行動などに影響することがあるのかどうか、伺いたいのですが。

アピセラ　わかりません。思いつきもしませんでした。血縁者ではないけれど外見的に似ているということですね。もしかしたら、例えば親切そうに見えるから、親切ということが期待されているから、親切にしようとか、そのような形で似てきたりするというのはあるのかもしれないですが、私自身もよくわかりません。

いまの方の発案でプロジェクトを立ち上げましょうか。ハッザ族の写真を全部集めて、あれだけ写真のデータベースを持っていますし、協力度のデータも集まっていますので、そういった顔を見ながら協力度が関係あるのかというのを調べるのもおもしろいかもしれません。日本人もとても協力的な国民性なので、その辺の協力度と、顔など外見の類似性に関連性があるかどうかを調べるというのもおもしろいかもしれません。

司会　ありがとうございました。お時間となりましたので、本日はこれで終わりにしたいと思っております。

アピセラ先生の仮説、協力行動の進化ということに関して言えば、協力行動は相互作用するということです。日野市におきましても、協力行動がとても豊かな地域だということを、私は感じております。協力行動は相互作用するということですので、日野市の人々は、これからもきっと、いろいろなプロジェクトを立ち上げて、素晴らしい協力行動の中でそれらをなしとげていくのではないでしょうか。

そして、実践女子大学の学生さんたちも、すばらしい協力行動をとっていらっしゃると思います。協力行動は相互作用するということで、よりよい生活をこれからも続けていけるので

はないかと感じております。

ぜひぜひ、アピセラ先生がおっしゃるように、この教室を出たら、よい行動を一つしていただきたいと思います。協力行動というか、よい行動は波及するのではないだろうかと思っております。

本日は皆様のご協力で、すばらしい講演会となりました。本当にありがとうございました。（拍手）

国際公開講演会
シリーズ2

音楽をとおした自閉症児とのコミュニケーション
――関係と感情を育むための発達アセスメントと支援ツール――

ベルリン芸術大学　音楽療法センター　教授
カーリン・シューマッハー

長崎　皆様、こんばんは。ウィークデーの夜にもかかわらず、お集まりいただきましてありがとうございます。山手線が遅延しているということで、まだ来られていない方も大勢いらっしゃいますが、時間ですので始めたいと思います。実践女子大学生活文化学科生活心理専攻企画の生活文化フォーラム、シリーズ国際公開講演会です。「生活の中での心の動きと支援2」としまして、「音楽をとおした自閉症児とのコミュニケーション――関係と感情を育むための発達アセスメントと支援ツール――」を始めさせていただきたいと思います。

まず最初に、生活文化学科長の松田先生からご挨拶をお願いします。

松田　皆様、こんばんは。どうぞ、お隣の方や近辺の方にもご挨拶なさってください。

本日はお忙しいところ、またこの夕方の遅い時間にこうしてお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

実践女子大学は歴史の長い大学なんですけれども、私ども生活文化学科は比較的新しい学科でして、この四月に創設からちょうど二十年を迎えました。そしてその二十年を前に、昨年度、生活文化専攻、名前を変えまして、生活心理専攻が誕生いたしました。生活文化学科には幼児保育専攻がございます。並びまして、新しく生活心理専攻が誕生いたしました。

生活文化学科は日野にございまして、ここ渋谷ではなく、日常的には日野のキャンパスに拠点を置いていますが、広く皆様方に生活心理専攻の存在を知っていただきたいということ、そして、本部の皆様に有意義な学びを分かち合いたいということで、今回、「生活の中での心の動きと支援」と題しまして、

シリーズで国際公開講演会を企画し、本日はこの渋谷に乗り込んでまいりました。

既にシリーズ一回目を、先週土曜日に日野キャンパスのほうで開催いたしております。アメリカのペンシルバニア大学のコーレン・アピセラ博士をお招きして、アフリカのハッザ族の社会性と協力行動に関するご研究について、大変興味深いお話を伺いました。

本日はシリーズ第二回目ということになります。今回はドイツのベルリン芸術大学のカーリン・シューマッハー博士をお招きしまして、ご講演をいただきます。この後、ご紹介があると思いますけれども、先生は長年、自閉症児者の臨床支援に尽力されている音楽療法士であり、また著名な研究者でいらっしゃいます。本日は音楽をとおした自閉症児とのコミュニケーションについてお話を伺えることを、大変楽しみにしております。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

長崎　進行をさせていただきます、実践女子大学生活心理の長崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

松田先生からもご紹介がありましたけれども、シューマッハー先生のご紹介を、簡単ですがさせていただきたいと思います。先生は現在、ベルリン芸術大学の音楽療法センターの教授でいらっしゃいます。先週、札幌で日本音楽療法学会がございまして、そこの招聘でご講演されまして、ぜひ東京でもお話を伺いたいということで、今回の講演会を企画いたしました。

松田先生からご紹介がありましたように、実践女子大学では二〇一四年度から生活心理専攻を立ち上げて、生活の中での心の動きと支援を中心に研究教育を始めました。音楽は私たちの生活の中でも大きな位置を占めていると思います。言葉を持たない赤ちゃんと養育者のコミュニケーションは、極めて音楽的であるということがわかっております。なぜかといいますと、そのやりとりは体の動きや声、表情が、豊かなリズムやテンポ等を持つコミュニケーションであるからです。

当然、言葉以前のコミュニケーションが豊かな音楽性を持つわけですから、コミュニケーションに難しさのある子どもたち、とりわけ自閉症の子どもたちに、音楽をとおしてのコミュニケーション発達の支援ができるという可能性が、最近いろいろなところで指摘されております。

シューマッハー先生はオーストリアのウィーンの近くのグラーツという町に生まれまして、その後、ウィーンで音楽療法のトレーニングを受けられました。その後、あの有名な映画『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台のザルツブルクで音楽と動きの勉強をされて、長年、自閉症児の音楽療法の臨床をされてきました。その間、ダニエル・スターンの乳幼児の発達理論を中心的・理論的な背景としまして、その支援の効果を、のちほどお話しいただくＡＱＲという方法によってアセスメントする、そういった研究をされていらっしゃる、いま非常に注目されている研究者、臨床家でございます。

本日は非常に短時間ではございますが、ご研究のエッセンスをお伺いできることを、大変感謝しています。

実は先週、東京に滞在されたときに、ちょっとお会いしお話を伺ったのですが、先生は歌舞伎座で歌舞伎を五時間鑑賞されて、「玉三郎、すばらしかった」とおっしゃっていました。その次の日には能を観に行かれたようです。和食と日本酒が大好きで、しかもとてもお酒に強くて、「札幌では、ナマコの酢漬けと「熊ころり」という北海道のお酒がおいしい」とおっしゃっていました。非常に日本を楽しまれたようです。

通訳は鈴木クブスキー園子さんにしていただきます。それでは早速、シューマッハー先生、よろしくお願いいたします。

シューマッハー　本日はお招きいただき、ありがとうございます。北海道医療大学の鈴木はるみ先生や私の通訳にも感謝します。

私が日本に接した始まりは、本日もいらっしゃっている、東京学芸大学の教授でおられた井口先生でした。私たちは四十年前に一緒に勉強をした仲間です。二人でオーストリアと日本の関係を築くために励みました。

その後、一九七六年に私は一度、日本に来たことがあります。ザルツブルクのオルフ研究所のオルフ・シュールヴェルクを日本にどのように伝えていったらいいかということで招かれました。

現在、日本でオルフ・シュールヴェルクが理解されていることをうれしく思います。自分たちの研究の根幹となすものを、ほかの国の人たちにも興味を持ってもらえるということは、とても意味のあることだと思うからです。

私の個人的なテーマとしていつも心の中にあるのは、他者、自分とは違うところで育った人たち、全くほかの文化で育った人たちを理解したいという思い。それによってまた、自分自身のことを改めて理解することにつながっている、ということです。

人の感情の発達を理解するために、私は今回、歌舞伎に行ったような気がします。例えばヨーロッパの人たちは、自分の感情をあらわすときに主にジェスチャーや顔の表情であらわしますが、歌舞伎の中では、それが声にとてもよくあらわれていたといえます。自分でも何度か練習してみました（声を実際に模倣してみせる）。日本の人たちは感情を示さないとよくいわれてきました。そしてヨーロッパの人たちは反対に感情表現が激しいと。でも心の深いところではそんな違いは無きに等しく、人は皆、心で感じることは同じではないかという思いがいたします。

もちろんそこでの文化、育ってきた環境の、またその役割も大きいものです。日本に来て十日間ですけれども、いままで以上に自分の腰が低くなったという気がいたします。

それでは、関係の質、関係を築く能力というのは一体どういうものなのでしょうか。どうして人には、人との関係を築くための能力が必要となるのでしょうか。

関係を築く能力を、人は生まれながらに持っているものです。この能力がなくては、人はあることを学ぶことができません。この能力を持たずに、他者が感じていることを思い、反応

することはできません。そこに情報の共有という言葉が生まれます。それは人間の持つ本当に大事な能力の一つです。それは既に胎児のうちに、生理的な発達に伴って培われているものです。

まず胎児の発達に目を向けていきましょう。音楽療法にとっては、以下の四つの感覚器官がとても重要な役割を果たします。

音楽療法の中で私たちは、とても重度な障害を持つ子どもたちと関係を築くために、あることをします。音楽療法では「聞く」ということがまず一番先に挙げられる能力ではないかと思われるかもしれません。でも一番大事なのは「平衡感覚」です。

皆さんが生まれて一番初めに聞いた音楽、それはきっと子守唄、揺らされながら歌われた歌だったのではないでしょうか。胎児のときに探知できる音楽というのは、動きなくしてはあり得ません。胎児が動かされるとき、それに合わせて「聴覚」も発達していきます。子どもが子守唄に合わせて揺らされたり、おぶわれたりすることはとても大事なことです。それは胎児のときの体験を生まれてからも繰り返すことを意味するからです。音楽療法の中では、この二つの感覚を結び合わせることをとても大切にしています。

それから、胎児として大事な感覚に「触覚」があります。その触覚の発達のためには身体感覚、体の感覚が大事になってきます。人は自分の触覚の発達のために人に触ってもらい、なでたり触る、そういう体験なくして触覚の発達というのは難しいのです。それは人と人との関係を築くうえで一番基礎となる能力です。身体感覚がうまく育ちきれていないときには、人と人との関係を築くことも難しいものです。

「味覚」と「嗅覚」、これも人間にとってはとても大事な感覚器官ですが、この二つは直接的に音楽療法で用いることはありません。でも人と人との関係を築くためにはやはり大切な感覚器官です。ドイツ語には、ある人と相性があまり合わないときに、「その人のにおいが苦手」という言い方があります。においでその人と合う、合わないを嗅ぎ合う、というところがあるようです。

最後の感覚器官として「視覚」が挙げられます。視覚は生まれるときにまだ完全に成熟し切っていない感覚器官です。だからこそ、本当に感覚、関係を築くことのできない、そういう子どもたちに対して、その目をのぞき込んで、目でコンタクトをとるというのはあまりいいことではありません。そのことについてはこの後、詳しく申し上げたいと思います。

私の仕事の中で、発達心理学のダニエル・スターンが一番深いところで、その基礎となっています。ダニエル・スターンは一九八五年に有名な『乳児の対人世界』という本を著しています。その本の中でダニエル・スターンは、乳児に何ができるかではなくて、いつ、どのようにその乳児が他者と関係を持つに至るかにポイントを当てています。

ダニエル・スターンはまた、乳児の感情の発達が、人と人との関係を築くうえでとても大事な要素となっていると述べてい

ます。私は感情の発達ということが、人間の成長のためにとても大事な原動力となっていると思います。私たちは認知的な発達のことはよくわかっているつもりです。例えば計算したり、読んだり、話をしたり、考えたり、そういう能力ですね。

それでは感情の発達というのは一体どういうことをいうのでしょうか。ちょっと考えてみてください。

ここでダニエル・スターンの自己発達領域モデルを見てみましょう。これは一九八五年以降、二〇〇〇年にダニエル・スターンがもう一度自分なりに書き直し、あらわした自己発達領域モデルです（図1）。この中で本当に大事な部分だけ取り出してお話ししたいと思います。

一番上の二つの自己ですけれども、これは「物語る自己」、つまり何かを説明したり話をして聞かせる自己、それから次が「言語的自己」となっています。セラピーや教育の中では、まずこの部分から始められることが多いものです。例えば人の心を扱う心理療法でも、この能力が最初に用いられます。

しかし、生まれて本当に初期の段階で何か傷を負った人たちにとっては、その言葉になる前の段階がいかに大事かということが、このスターンの自己発達領域モデルであらわされています。

人と人とのコミュニケーションをとっていくために、言葉以外にどんな能力が必要となるのでしょうか。言葉であらわされる以外、例えばその感情を伝え合うということも、大事なコミュニケーションといえます。それは、その人そのものをあら

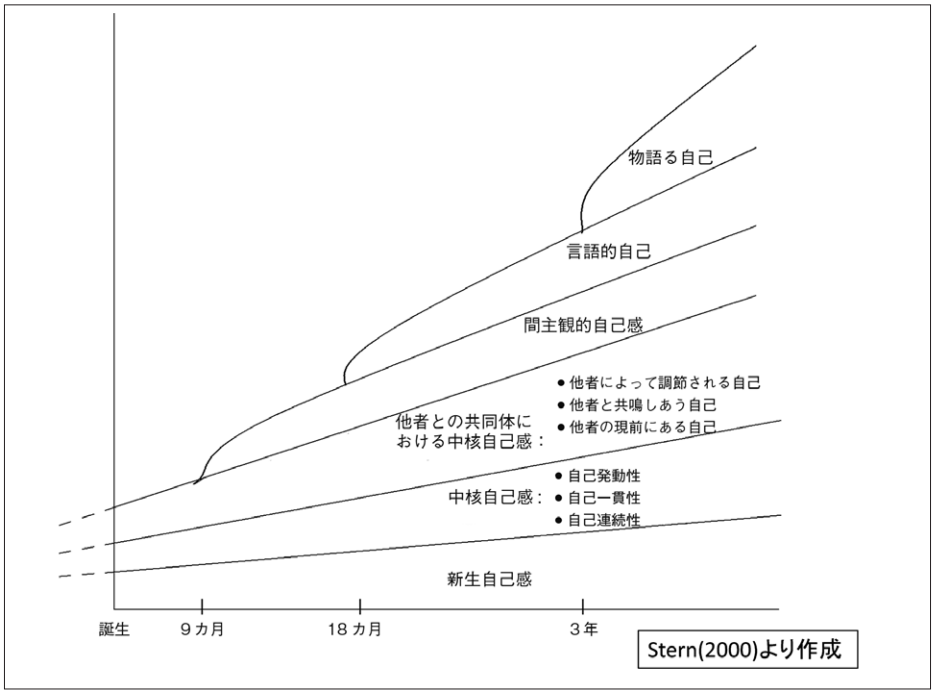


図1　自己感の発達【Stern(2000)より作成】

わすこと、といえるでしょう。

例えば、自閉症の方たちとよく接している方たちは思われると思うのですが、自閉を持つ方たち、言葉では何か会話ができるようであっても、その子どもが人として本当に伝えようとしていることがなかなか伝わってこない、という思いをされることがあると思います。

その子どもたちにできる言葉の表現というのは、いわゆる反復行動、反響言語ですね。その子どもたちのしゃべる言葉にはメロディとか言葉の流れというものがあまりなく、ただの言葉の繰り返しになります。

例えば、私がフランツという男の子に「フランツ、お腹すいてるの？」と聞いたとします。そうすると、「うん、フランツ、お腹すいてる」と返ってくる。フランツ自身、本当にお腹がすいて、自分の言葉として、自分の感情としてそれをあらわしているというよりも、聞かれたことをそのまま返しているという、そういう言葉の伝え方をする子どもたち。言葉ではあっても、そこに感情が育っていないことのあらわれです。

この自己発達領域モデルの一番下の部分からまず見てみましょう。ここには「新生自己感」とあります。これは自分の体の感覚の発達をいいます。そして「中核自己感」は、自分自身を育てるということです。例えばこの行動をしているのは自分だ、という感覚ですね。それを「自己発動性」といいます。この手は私の手だ、という感覚、これが「自己一貫性」です。例えば自分のやったことが何かほかに影響してくるという、それを「自己連続性」。自分がこの世界の中にいるということ、そこに自分が何か影響を残すことができるという。その感覚が育つことによって、人にはもっと発達したい、もっと学びたいという欲求が生まれるものです。

しかし、それと同時に感情、人間の内に起こる感情もバランスをとっていかなくてはなりません。例えば生まれてくるとき、赤ちゃんは歌いながら生まれてくるのではなくて、叫びながら生まれてきます。叫ぶということが、人間が本来深いところで持っている本能的な欲求です。

でも私たちには、その叫びも何かで調整される必要があるのです。どうして叫ぶのか、それを理解してくれる他者、自分以外の人が必要なわけです。人間が生まれて最初の六カ月の間、それが何千回も繰り返し行われているわけです。それはもちろん泣いている自分に反応してくれる親なり、ほかの人がいるからです。人間にはその欲求があります。それを調整してもらいたいという欲求があります。

例えば自閉症の子どもの場合、そういうお母さんなりお父さんなりの気持ちを、自閉症の子どもは理解できません。それは母親や父親にとって、とても厳しいことです。母親が子どもを自閉症にするのではなく、子どもにその能力がないために、調整しようとして一生懸命頑張るお母さんの心をも自閉させてしまうのです。

自閉症の子を見てみると、自分の感覚、まだきちんと見つけられていない障害が多くあります。自閉症の子どもたちには

身体感覚が欠けています。そのために感覚が調節されません。それができないうちに、他者とコンタクトをとるということはなかなか難しいものです。

「間主観的自己感」、自分と一緒にそこには他者がいて、その他者を受け入れられるという自己感というものが育つためには、いま言った感覚の問題、それから自分自身を育てるという問題、それから他者によって調整される感情というものが必要になります。

その間主観的自己感があって初めて、言葉でのコミュニケーションが容易になるのです。例えば自閉症児で反響言語がある子どもの言語療法をする場合には、その前にまず、言葉でのコミュニケーションを養うために必要な感覚である新生自己感、中核自己感、そして間主観的自己感を養います。そのうえで初めて、言葉でのコミュニケーションが可能になるというわけです。

ここから皆さんに、私の音楽療法の症例をビデオで見ていただきます。他者と相互関係を築く能力のために必要となる、「感覚」「情動調整」「自己有効性」「共同注意」「対話」「喜びの共有」という六つの段階ごとに、皆さんに実際にビデオで見ていただきます。この六つが全て音楽療法で大事な問題になってきます。

まず、普通の発達を遂げている子どもとお母さんの様子をビデオで見ていただきましょう。

（ビデオ）

これは本当に普通のお母さんと乳児のかかわり合いですね。乳児は本来、お母さんと目を合わせようとします。アイコンタクトができるということ、それは、その子どもの感覚が既に統合されているからこそ目を合わせることができる、ということです。お母さんは、子どもが視覚にとらえることができるような距離、それこそ本当に近くで目を合わせようとしています。

人と人との関係を育てていくためには、子どもの発達だけでなく、他者も一緒に発達していくというか、他者の関係を築くという能力も、とても大切になります。子どもは普通に育っているにもかかわらず、お母さんの側に問題があるため、その子どもの感覚をも阻害してしまう、ということがあり得るのです。例えば子どもが出す声にお母さんが無反応であったりとか、子どもが全く見えないところにいつもお母さんがいるとか。

人と人との関係を見るときには、私たちセラピストが、いまどのように子どもと関係を築こうとしているのか、それもきちんと見る必要があります。

アイコンタクトを成り立たせるためには、その子どもの感覚器官が相互に結びついているということが大事です。それによって今度は生気情動が生まれてきます。この生気情動というのは、声と体の動きにあらわれます。

ここで自閉症の子どものビデオの例を見ていただきます。八歳になる男の子で、紐を使ってステレオタイプの動きをしています。

（ビデオ）

次に、ある乳児が、やはり紐で遊んでいる様子をビデオで

見ていただきます。

（ビデオ）

子どもが同じ紐でひとり遊びをしていますが、二番目に見ていただいたビデオでは声を出しながら遊んでいる。それで遊びながらお母さんのほうを見たりして、自分が遊んでいるということだけではない様子を見せている。紐をゆすっているなと思ったら、それをまた机の上に投げ出したり、紐にこだわりがない。一番特徴的なのは声です。遊びのときにどのように子どもが声を使っているか。その子どもが歌舞伎役者になるかどうかはわかりませんが……。

遊びながら自分の気持ちを声であらわしている。それは、やはり自閉症の子にはないことです。自閉症児の場合、紐のかわりにもっと大事なものを私たちは提供する必要があります。

この子どもは動かされることが好きなのです。トランポリンの上で飛び跳ねることがとても好き。

（ビデオ）

動かされることによって、その子どもの関心は紐ではなくて、その体に起こる動きに向けられます。他者によって刺激を与えられることによって、自分自身に与える刺激、自己調整への欲求から逃れることができる。子どもをただ動かすのではなく、子どもが自分自身の体と関係づけられるように動かす、ということです。

トランポリンの上で、どんなテンポでどんな強さでその子どもと一緒に飛ぶか、それもとても大事な要素です。そして子どもは動かされることによって、今度は耳が開いてきます。動かされているときに何か聞こえてくるということを感じられると、その子どもは右を向いたり左を向いたり上を向いたり、どこからその音がやってくるのか確かめようとします。

ですから、感覚器官、例えば耳だけとか、動きだけとかではなくて、二つ以上の感覚器官が結ばれたときに初めて、子どもはそこに関係性を見つけようとします。

先ほど申しましたように、人と人との関係というのを、まず体の「感覚」から始めます。そのことは、自閉症研究の中でもまだ盛んに行われてはいない部分です。人間は自分の体をどのように感じているのか。例えば、自閉症の子どもで、言葉のある子たちから、自分の体が首から上のみで存在しているというような印象を受けます。ですから、よくつまさき立ちで歩くような体の動きが見られます。

例えば右手はある動きをしているけれども、左手は全く違う動きをしている、そのときに首は関係ないような違う動きをしている。それは私たちの自己一貫性、体の一貫性、自分の体を自分のものとして感じる、その感覚が欠けている、ということになります。

ここから、私たちは次のテーマ、「情動調整」に移ります。情動調整の必要な子どもたちというのは、やはり身体感覚が育ち切っていないというところにあります。

次の症例の子どもは、何か自分の中で湧き上がってくるものがあると、いつも自分の手の甲を噛みます。うれしいときも、

怒ったときも、とにかく感情が高まったときに、いつもこの行動があらわれます。この子は孤立しているわけではなくて、私のことをよく見ます。この症例の初めに、この子は私の額をたたきます。でもそれは、その子どもにはたたくという行為が何らかの形で必要だったからです。そのとき、私はすぐに「私のことをたたくのではなく、ここにある太鼓をたたきなさい」と促します。私のかわりに太鼓をたたくようにと。その子どもがそういう形である程度感情をあらわしてくれることで、私はセラピストとして、その感情を分け合うことができる。そして、その感情を分かち合うことによって初めて、高ぶった子どもの情動は調整されるのです。

この子どもがしゃべる言葉は一語だけあります。それは「壊れた」。その「壊れた」を私は歌にします。その「壊れた」によって歌をつくっていきます。「壊れた」という言葉そのものには、あまり意味がありません。そうではなくて、私たち二人の間にある情動が一番問題となります。

（ビデオ）

その子どもが混乱しているときに「静かにしなさい」ではなくて、そこに、一緒に叫ぶ、その叫びを分かち合う人がいるということが必要です。そのときに、ただ叫ぶだけではなくて、私はセラピストとして、いろいろな要素をその子どもに提供しています。ここでは太鼓、そして私の声。

このように、強弱やめりはりでその感情を調整するときに最も大切になることは、そこに、ある形を与えることです。強い、激しい情動を調律するときに必要なのは、調律するのみではなく、方向を与える、そこに形を与える、その怒りを形にする。そして、そのときに子どもが爆発してどうしようもなくなってしまうことのないよう、その感情に行き場を与える、方向づけをする、ということです。

形をつくる、ということをドイツ語では、ゲシュタルトする、というのですが、それによって情動を調整していく。そうやって、自分の激しい情動を分かち合ってくれる人がいるということに気づいたときの、その子どもの目、視線。それを子どもは何回も何回も、やってくれ、というように要求してきます。自分の情動が調整できるまで、子どもは繰り返しその要求をしてきます。

この症例では声とリズムを使って調律を試みましたけれども、子どもがそのような状況にあるとき、体を使っての調律というのも、とても大事な要素となるでしょう。子どもを抱え込み、その自由を奪うのではなくて、そこに支えを置く。ただ縛るのではなくて、支える、ということです。

情動の調整というのは、ほかの人がそれにかかわってくれることによって初めて成り立つ行為です。ですから、子どもが自分で情動を調整し切れずにいるときに、一緒に向かう他者が必要です。

では次のテーマに移りましょう。スターンの自己発達領域モデルの中では、感覚と情動調整の次にとても重要な要素として「自己有効性」があります。この自己有効性と、ほかの人を自

分と関係づけるという意味での「共同注意」というのは、とても近い関係にあります。

ここで、二つ続けて子どもの例を見ていただきます。

（ビデオ）

お母さんはどのようにして、この子どもを一つのものに向かわせているのか。お母さんは本当によく子どものことを見ています。そしてその子どもも「お母さん、見てよ、僕、タンバリン弾いてるよ」ということをお母さんに確認するかのように、お母さんを見ます。お母さんは、子どもに何か新しいことを始めさせよう、ではなく、その子どもが十分にその活動を楽しめるように、時間をたっぷり与えています。

子どもが一つのことに向かって集中しているときに、お母さんがしてはいけないことは、子どもの関心をほかに向けるということです。その子どもに自己効力感が育つよう、その活動に子どもをしっかりと向かわせる、ということが大事です。

いまから自閉症の子どもの症例を一つ見ていただきます。この子は八歳ですけれども、初めて、さっき見た乳児がしたようなことをやっと始めます。この子どもは、何か新しいことに向かうというのではなくて、自分のしている行為をしっかりと見つめています。

（ビデオ）

この社会的な参照を求める視線は、子どもを孤立した状況から逃れさせる大事な視線になります。この子はさっき、紐で遊んでいた子どもです。この子どもは自分の感情を表出することを学びました。そしてそれを他と結びつけようとする、その要求がよく見られます。

この社会的参照を求める視線があって初めて、間主観的自己感が生まれてきます。自分が体験したことをほかの人に一緒に体験してほしい、それを見てほしいという要求です。例えば、そのときに自分の中で起こった感情を、ほかの人も同じように持ってくれるのか。それがどのように他者の中に影響を及ぼすのか。そのとき、他者が自分から活動的になることは避けるべきです。その子どもがしている、向かっていることに、十分に時間を与えるようにしたいものです。

スターンはそのときのセラピストとしての介入を、その子どものいる、まさにその場所で行いなさい、と述べています。私は療法士として仕事をするにあたり、私自身アクティブに何かをしているときであっても、アクティブになり過ぎない、インアクティブ、つまりアクティブでない部分を必ず持つ、ということを大切にしています。

それは、子どもが何か活動を始めているときに、私はきちんとその活動を受けとめてあげているのですよ、ということを、インアクティブ、自分が何かをして示すのではなく、何もしないことによって示す、ということです。それによって、子どもが自ら探求に向かう、自分のしていることを探求するという、そこに向かわせることができます。

それは子どもに模倣をさせるということではなくて、子ども自身が自分のしていることを発見するということです。その

ときに必要なのは、やはり他者が一緒にいるということです。それによって子どもが、一人で遊ぶのではなく、そのときの気持ちや、その遊びで起こった感情を分け合う人がいる、ということを確認できるのです。

それはその子どもに、次の対話的な活動を可能にしていきます。また、子どもとこれから教育的にかかわるときに大事な要素となってきます。本当にきちんと自分から対話をする能力が育っていない子どもに大人がなにかをやらせると、それはただのまねになってしまう。大人を満足させるために行うまね、模倣に終わってしまう。その子どもが自分のしていることを学ぶのではなく、大人がしたいと思うことをやる、というほうに行ってしまうわけです。

ドイツにゲラルド・ヒューターという脳神経学者がいます。そのゲラルド・ヒューターが言ったことですけれども、学びたいという要求は、うれしいという感覚があって初めて発達してくるものだ、ということです。自分がしていることに対する喜び、それを分かち合ってくれる他者がいるという喜び、それがあって初めて、学ぼうという、その学びの原動力となるのです。

その考えは自閉症児と活動を、というか、自閉症にかかわっている人たちにとっても重要な示唆になります。喜びがあって初めてその子どもは自発的に学んでいこうとするものだと思います。

自分がしていることに関心が向いて、それが十分に行えたときに初めて、今度は「対話」としての喜びが生まれてくるものです。

それでは次の対話的な能力をあらわす図を見ていただきましょう。対話というのは一方的なものではなく、子どもが私をまねするときもあるけれども、私が子どものアイデアをまねするときもある。そのバランスですね。

ここで、ある子どもの症例から、ダンスの音楽を使ったものをご紹介します。この子どもはその音楽に合わせて数えることを始めます。私もそれを受けて一緒に遊ぶのですが、そこに少しずつですけれども、私のほうからアイデアを出していきます。皆さん、よく見ていただくとわかると思いますが、子どもは私が出すアイデアに対して、即座に対応しているわけではないのです。そうではなくて、自分のやることに私がどのように対応するかということを、ちょっとコントロールするように、確かめながらこの遊びを続けていきます。

（ビデオ）

この症例では、この子の情動はとても落ちついています。情動が調整されている状態で初めて、こういう対話的な活動が可能になるわけです。そしてその後、初めて「喜びの共有」が起こります。

ここで一つ、症例を見ていただきます。この子は、さっきの紐での常同行動があった子どもです。

（ビデオ）

この症例は、セラピストと子どもの間の関係をいかに培っていくことができるかということの集約だと思います。子どもが

たたいている、そのリズムに合わせて私は曲を歌います。そして、子どもの首の動きに合わせて、「はい」と「いいえ」で応えます。このように子どものあふれ出てくる感情を分かち合うことによって、二人の共通の活動をとおして、情動の共有、喜びの共有ということが可能になってきます。

関係を築く能力というのは、まず自分の感情を表現し、外にあらわすことができる能力であり、ほかの人の感情を同時に感知し、共有する能力をいいます。また、他者が持っている感情がどんな感情であるかということを認識できる能力、それが、関係を築くうえでとても大事な能力になります。

この音楽療法で起こっていること、それをどのようにアセスメントしていったらいいのか。それをもとに、発達心理士であるカルベと一緒に、私はこのＡＱＲ、関係の質アセスメントツールを発達させました。

私たちは二、三年間通しで、子どもたちの音楽療法のビデオを分析することから始めました。そしてその子どもが全くコンタクトのない状態から、喜びを、情動を共有するところまでを、私たちはモードとしてあらわしました（図２）。

そのときに私たちはスターンの自己発達領域モデルを参考にして、０から６のモード、コンタクトモードといいますけれども、これを発達させました。

モードの０だけは、スターンの本の中にはありません。というのは、スターンは自閉症児ではない子どもを対象に、自己発達領域モデルを開発したからです。

関係の質―7つのモード

- モード０　コンタクトのない状態／－拒否
- モード１　感覚器官によるコンタクト／コンタクト反応
- モード２　手段としてのコンタクト

- モード３　自己とのコンタクト／自己体験
- モード４　他者とのコンタクト／間主観性

- モード５　他者との関係／間活動性
- モード６　出会い／間情動性

図２　関係の質―７つのモード

自閉症の子どもと関係をつくろうとする場合に、その子どもにコンタクトのない状態というのはよくあることです。その子どもは、音楽療法士の弾く音に全く反応を示しません。何をしようが、自分で療法室に入ってきたとしても、関心を示しません。「ここに来て一緒に遊ぼうよ」なんて言っても全く反応はありません。

モード1は、いわゆる感覚が大切になるモードです。その子どもに強い常同行動が見られるような状態のとき。例えば子どもは楽器に手を触れるかもしれないけれども、それは楽器を弾く行為ではなくて、それを口に持っていってなめるなど、楽器として認識していない状態。その子どもは、自分の感覚で何かそこにあるものをとらえようとはしている。でも、その自分の感覚を一つにまとめ切れていない状態です。

そのとき、セラピストは介入として、その子どもの感覚器官をつなげる、結びつける方法をとります。

モード2、ここでは子どもの情動が前面に来ます。子どもの高ぶった感情、その情動の状態に、セラピストとしてここで何かをしなければいけないという気持ちにさせられます。そのとき、セラピストは子どもの感情に仕える者、手段として扱われる者のように思うものです。スターンは自己発達領域モデルの中でこれを、他者によって調整される自己、とあらわします。

そして、その情動が調整されて初めて、モード3の状態、自分自身とのコンタクトが子どもにあらわれます。その子どもの中で自己有効性が育って初めて、今度はその子どもの関心が自分から他者へと向かっていく。それがモード4の間主観性の発達です。

このモード4から、他者との間の活動が可能になってきます。その子どもは初めて、自分と他者、その二人の人間がいるということ、その関係を見つけようとし始めます。

それがモード5では、共通の活動を可能にし、情動、その気持ちを、喜びを分かち合うというところにまで来ます。

でも、実践していく中では、その子どもがモード0の段階から、だんだんモード6に行くなんていうことはなかなかないことです。そうではなくて、その子どもがずっと一つのモードの中でウロウロ、その上をちょっと行ったり、下がったり、そういうことを繰り返すものです。

そのときには、セラピストの柔軟性、子どもの状態をそのときに合わせてきちんと見つける、ということが大事なことになります。子どもとセッションを行っていて、その子どもがよくとどまっているモードというものが必ずあるものです。そのモードの中でも、今度はちょっと上に行ったり、ちょっと下がったりという、ピークということが見られます。

モードの急激な変化、上がったり下がったり、そういうことをピークといいます。関係の質でアセスメントをするとき、私たちはセッション全部をアセスメントすることはしません。短いある部分を取り上げて、そこをアセスメントするようにします。

そのとき私たちは、子どものモードがベースモード、本当に

そのモードにとどまっている状態のベースモードなのか、ピークなのか、それをきちんと見分けるようにします。一番大事なことは、子どものモードとセラピストのモードが合っているかどうか、それをきちんと見分けることなのです。

例えば、子どものモードが0のときに、セラピストがモード5で子どもに一生懸命対話をしようとしている。そこには関係というものは生まれません。そのため私たちは、視覚化して見ることのできるこの表を大切にします。

子どものモードがどこであるか、そしてセラピストのモードがどこにあるか。例えば子どもが楽器を使って何か活動をしているときに、この黄色の球ですね、これでモードを確認します。そして声のときには青、そして、声でも楽器でも表出がない、そのときには身体的な面と感情の表出から関係性の質をあらわそうとします。これは赤です。

そして、緑は子どもではなくてセラピスト自身、セラピストとその介入をあらわすものとなります。例えば、セラピストがどんな介入で、どんな表現を用いて子どもと関係をつくろうとしているか、それをあらわすのがこの緑のスケールです。セラピストも、自分がどのモードにいるかということを必ず頭に置いて、セラピーを行います。

子どもが情動にとらわれているときは、この赤い球が4ではなくて2の状態。例えばそのときに、セラピストの介入が情動に合わせるのではなくて、何か一つの歌を使って子どもにこっちを向かせようとしているような介入を行っている、そのセラピストの介入は、モード5となります。

子どもが2の状態にあるときに、セラピストが5の介入をしていても、その間に関係というものが生まれないと理解していただいて結構です。

例えばそのときに、セラピストがその子どもの感情の苦しみ、その表出に合わせていかなければいけないということで、感情をテーマに介入を行った場合には、セラピストの（緑の）球は、2。その子どものモードとセラピストのモードが合ったとき、初めて関係というものが生まれてくる可能性が見つけられる。

そのために、子どもの発達のモードを正しく理解し、セラピストとしてそのモードに合わせた介入を行う、というテクニックを学ばなければなりません。

そこから私たちはセラピー、治療と教育という関係でも、このアセスメントを見ていくことができます（図3）。この右側にあるのがモードです。左が療法的な分野なのか、教育的な分野なのか。その右のモードの隣の矢印は、子どもの障害の重さをあらわしています。子どもが全く関係を築こうとしないとき、または自分の情動にとらわれているときに、音楽教育的なかかわりというのは難しいでしょう。

情動が調整されてこのモード3の状態になって初めて、子どもはだんだんと自分自身とのコンタクトを築き、それがあって子どもの関心は他者へと向かっていくのです。このモード3の状態のときに、音楽教育と音楽療法の重なりを見ることができます。

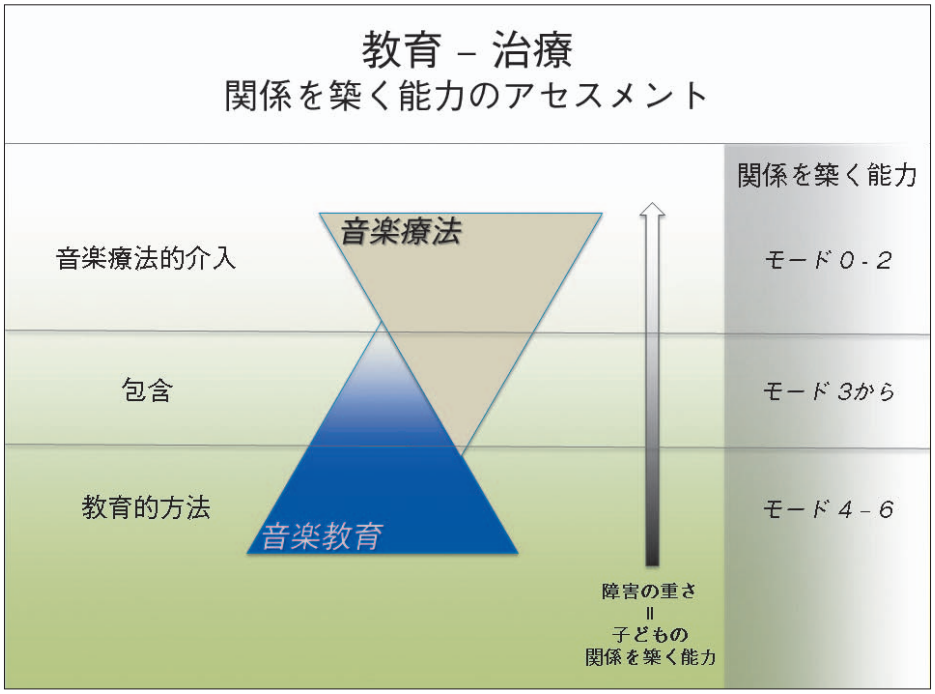


図3　教育―治療：関係を築く能力のアセスメント

例えば普通の子どもたちは、大体このモード3のあたりから幼稚園に入園します。モード4の「共同の注意」。これがなければ子どもは学校の教室に座って勉強することは難しいでしょう。

そこから子どもが、今度は学びたいという欲求を持って学校に通うようになる。ドイツでもテーマはインクルージョン、日本でもきっと大きなテーマになっていることと思います。例えばモード2、情動にとらわれている子どもを、モード4の状態に押しつけたらどうなるでしょうか。

例えば身体障害のある子どもでも、自己効力感をきちんと持っている、障害を持っていても自己効力感を持っている子どもにとっては、学ぶということが大切な要素になっているでしょう。

そのときに、子どもはほかの子どもと一緒に学ぶということができてくるはずです。情動の調整ができていない子どもを学校の教室で、ほかの子どもと一緒に学ばせようとすれば、まず難しいことになるでしょう。そのためには何か道を見つける必要があります。

そのとき、セラピストがもしかしたら何かアドバイスなり、何かほかの提案をすることができるかもしれません。セラピストは、重度の子どもと一緒にセラピーすることに慣れているからです。

それでは最後に、教える者にとって、また育てる者にとっても、何が重要な点となるのかということについて見ていきましょう。

セラピストとして私たちが持っていなければならない重要な要素は、敏感な感受性です。私たちは子どもが何を求めているのか、きちんと感知しなければなりません。私たちは十分に時間をとって、どうして子どもがそういう状態にあるのかということを見つけなければなりません。もし、たくさんの子どもがいる教室の中で一人の子どもを見るとしたら、それはまず難しいでしょう。

でも、その一人の子どものためにクラス全体が、それから先生自身にも、それはとても大きな課題です。そして本当に問題をきちんと見つけて、それに対応するということはとても大事なことです。例えば情動の調整ができていない子どもを、まず教室から出して、その子どもに情動の調整のためのセラピーを行ってから、また教室に戻すとか。

問題を見つけられないと、教室全体が、先生も子どもも、それから情動にとらわれている子ども自身も、皆が苦しんでしまうことになります。

どうしてその子どもが教室の中で問題を起こしてしまうのか。それをAQR、関係の質アセスメントで見ることによって、その子の抱えている、もっと本質的な問題を見つけてあげることができるかもしれません。

そのときに、問題を見つけるだけではなく、どう介入するかもとても重要な課題で、それはクラスの大きさとか学校の様子とか、そういうところとかかわりを持ちながら解決していく必要があるでしょう。

ここで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

長崎　シューマッハー先生、ありがとうございます。

本日のシューマッハー先生のお話は、ダニエル・スターンという心理学者の情動調律、英語ではaffect attunementというんですけれども、その考え方を基盤にしている。ところが日本ではダニエル・スターンの紹介が必ずしも十分にされてこなかったように思います。きっとこの中でもダニエル・スターン、名前を聞いたことはあるけれど、あまり大学の教科書などで勉強した覚えはないな、という人が多いと思うんですけれども、実は欧米では非常にポピュラーな発達心理学者だったんですね。

どうして日本でそういうことになったかというと、日本の翻訳本は精神分析の小此木啓吾先生ら、精神分析医学関連の人たちが翻訳したということもあり、発達心理学や教育の中で十分には紹介されてこなかった、という経緯があるようです。

私もこの間、いろいろと日本の発達心理学のことを調べてみたんですけれども、非常に扱いが少ないように思いました。

しかしいま、いろいろなところでもう一度スターンを見直そうという機運が高まって、SCERTSモデルなどでも非常にスターンを重視しています。特にまた、自閉症のお子さんたちは情動の調整に問題がある、emotion regulationの問題があるということがいろいろなところで言われていて、DSM5でも、social emotional deficiencyと、社会情動の障害が自閉症の一番目の診断項目に挙げられたということもあり、情動をどうやって評価して支援するかというのが、自閉症の教育の中でク

ローズアップされています。

そういう中で、もう一度スターンが見直されているのではないかな、と私は強く思いました。

本日のお話の中で、健常の赤ちゃんのビデオと自閉症のお子さんをペアで見せていただいて、非常に新鮮だったと思います。つまり、自閉症の子どもたちの問題でなくて、発達の問題なんだ、情動調整の発達、調律の発達の問題なんだ、ということを非常にわかりやすくお話しいただいたかなと思います。

私たちも学ぶべき、学べることが多かったと思いますし、また、私たちがどういう観点でこれから勉強し、子どもたちの支援に当たったらいいかという、いろいろな観点を与えてくださったと思います。

この後、少し時間がありますので、ぜひ皆様から率直な感想なり質問なりをいただければと思います。マイクを何本か用意していますので、手を挙げていただければと思います。いかがでしょうか。

はい、それでは真ん中の方、お願いします。通訳がいますので日本語で結構です。もしよろしければ、お名前と所属をお願いします。

山下　宮崎の山下と申します。音楽療法士をしております。貴重なご講演をありがとうございました。セラピストの介入モードの違いというところを今回考えることができて、とてもいい経験になったと思いました。

二点質問がございます。一点目なんですけれども、自閉症の子どもたちのセラピーをしているときに、何か身体的な運動をしながら、声を出すという場面がたくさんございます。そうすると、声を出しながら体を動かすということが統合された状態のほうにモードが移っていくと理解してよろしいでしょうか。インテグレートされた状態になっていっている、ととらえていき、そして声に抑揚が出てくる場面がございます。それは、さらにモードが進んだ状態としてとらえてよいだろうか、ということが一点目の質問です。

長崎　ではまず一点目で、ちょっと区切ります。

シューマッハー　動かされることによって、感覚が統合されるということ、それによって声の表出が起こる、そのようにとらえていただいていいと思います。

そしてその表出、声を出したということを子どもが自分で感知したところで、発達がまた一つ生まれる。最初に介入として必要なのは、例えば声の表出をしたときに、子どもが自分で自分の声を出したという意識がある、ということです。ですからそこにいくまでに、やはり感覚的な器官を統合していくという、結びつけていくということが大事だと思います。

例えば、その子どもの声に抑揚が出てきたとしますね。それを本当に子どもが意識していれば、モードが上がる。でもそれを子どもが意識しているようではなくて、ただ、それで反応しているだけであれば、そのモードはまた違うモードになっていく。

子どもの顔の表情とか、どこに自分の様子が向かっているか、

それによってセラピストは、その子どもが自分の声として感知したかどうかというのがわかると思います。

山下　ありがとうございます。今後に生かしていきたいと思います。

もう一点だけ。今回のビデオは、セラピストと子どもたちの一対一の関係だったんですけれども、後半で少しありましたように、グループを持っているとしたら、モードの4ぐらいからグループ活動というのが可能となっている、という理解でよろしいかどうかということです。

シューマッハー　そのとおりです。その子どもが他者を受け入れられるようになって初めて、グループ活動というものに意味が生まれてくる。それによってまた、ほかの子どもから発達の手助けを受ける、ということも可能になってくるわけです。

「共同の注意」、ジョイントアテンションがあって初めて、グループ活動というものに取り組める。そうですね、自分と他者のほかに、第三者の存在ということになりますから。

山下　ありがとうございました。刺激的なお話でした。

長崎　後ろの方、マイクをどうぞ。

土野　日本大学芸術学部で音楽療法を教えております土野と申します。本日はとても貴重な、また非常に共感を持てたい時間でした。

印象に残ったのは、身体と情動、関係性というのはクロスしているということです。どれを欠いていても、多分、うまく成立しないだろうということがよくわかりました。

それと、一番最初のセッションで、必ず、どんなときでも、先生自体がタッチをしていて、特に足の側をこういうふうにタッチをしていて。多分、子どもたちにとっては触覚的な不安がある場合に、自閉症のお子さんの場合には先足になったり。そういうところを、うまく音楽を介入させながら統合させている、というところが見られたと思います。

一つ質問なんですけれども、モードのところで、0というのがありますね。ここに「コンタクトのない状態ということ、拒否」ということが書いてあります。「反応がない」というお話だったと思います。

でも、私たちと適切な距離感を置くようになって、例えばカーテンの中へ入ってしまったりというようなお子さんでも、必ず音楽というものはどこかしらで受容するというか、受容しようとしている、ということはいえると思って。それを「拒否」としてしまっていいのでしょうか。

シューマッハー　まず、子どもの足の裏をたたいていたということ。それは最初、その「接触」をした段階で子どもがそれを受け入れるかどうかを見るために、そのボディコンタクトがあったわけです。けれどもそのときに、子どもの反応が全くなかったわけですよね。だから今度は「動かす」ということで、体の動きということに介入の方法を変えたのです。最初のその触覚で反応し切れない子どもに対して、次に体の動きで対応するということです。

質問のほうですが、例えば、その子どもがカーテンの後ろに

隠れていても、もし音楽を聞いていたとしたら、子どもの様子は拒否している状態とは全く違うと思います。それはそこにいるセラピストも感じられるのではないでしょうか。

もし子どもが音楽を聞いているのであれば、その子どもの関心が他に向かっているということですから、モードでいうと4にあたります。モード0というのは、全くそれがない状況、子どもが自分にのみ捕らわれているというか、全く他とかかわりを持たないという状況のことです。

長崎　ありがとうございました。まだまだ質問があると思うのですが、時間の制約がございます。しばらくは会場におりますので、ご質問のある方は先生のところへ来ていただければと思います。

本日は二〇〇人近くの方にお越しいただきました。音楽療法だけでなく、特別支援教育や保育の方々、一般の教育の方々もいらっしゃいました。そういう意味でも、いろいろな示唆を得られたのではないかと思います。

本日のお話には出てきませんでしたが、実はこのＡＱＲの本を、何とか日本で翻訳しようと計画中です。また皆様に詳しくご紹介できると思います。

また、別の機会にお会いできるのを先生も楽しみにしています。大分遅い時間になりましたが、皆様、気をつけてお帰りください。シューマッハー先生へのお礼の拍手をもって終わりにしたいと思います。（拍手）

〔キーワード解説〕

自己感(sense of self)
自己感とは、乳児の発達のオーガナイザーであり、スターンの理論の中心的役割を担うものである（D・スターン（1989）乳児の対人世界 p.234）。

生気情動(vitality affects)
怒り、喜び、悲しみなどダーウィンのカテゴリー情動に対して、〝湧きるあがる〟〝あせってゆく〟〝そそくさとした〟など動きのある概念を特徴とする体験の質をいう（Stern, 1992, p.83）。

自己発動性(self-agency)
意志を持ち、自分で起こした行動をコントロールでき、自分が行動の発動者であることを感知し、自分で起こした行動に対してその結果を予測できること（自己有効性と同義）(Schumacher, 2011, p.82)。

自己一貫性(self-coherence)
自分の体全体を総体として知覚すること。それは動いている時（行動）にも、静止している時にも、自分の体とそうでない境を、また自分の体が行動の中心であることを認識していることをいう（Stern, 1992, p.106）。

間主観性(intersubjectivity)
心理的な親密さ。主観的な体験を他者に委ね賛同を得ること（Schumacher, 2011, p.82）。体験した出来事と事柄を分かち合おうとすること(Stern, 1992, p184)。

〔参考文献〕

Schumacher, K. & Calvet-Kruppa, C. (2007): The "AQR-Instrument"(Assesment of the Quality of Relationship) - An Observation Instrument to Asses the Quality of a Relationship. In: Wosch, Th., Wigram, T.: Microanalysis in Music Therapy- Methods, Techniques and Applications for Clinicians, Researchers, Educators and Students. S. 79-91, 2007, Jes-sica Kingsley Publishers Ltd.: London, Philadelphia.

Schumacher, K. & Calvet, C. (2008): Synchronisation/ Synchronization- Musiktherapie bei Kin-dern mit Autismus/ Music Therapy with Children in the Autistic Spectrum. Unter Mitar-beit von Manfred Hüneke und Petra Kugel. DVD-Box, Göttingen: Vandenhoeck & Rup-recht.

Schumacher, K. (2013): The importance of Orff Schulwerk for Approaches: Music Therapy & Special Music Education. Special Issue 5 (2), 113-118. Retrieved from http://approaches.primarymus.

Schumacher, K. (2014): Music Therapy for pervasive developmental disorders, especially au-tism - A Case study with theoretical basis and evaluation. In: Jos de Backer et al: Music in Music Therapy, Kingsley.

Stern, D. (1985/2000): The interpersonal world of the infant. New York:Basic Books.（スターン・D（一九八九）乳児の対人世界―理論編―（小此木敬吾・丸田俊彦監訳神庭靖子・神庭重信訳）岩崎学術出版）

Ⅱ

公開市民講座

暮らしをとらえなおす

日野の保育と教育

＊ 生活文化学科　平成27年度　公開市民講座
平成27年9月26日 開催

はじめに …… 42

松田　純子　本学生活文化学科 学科主任 教授

上演会

パネルシアター上演 …… 44

本学OG、在校生

講話①

子どもにとっては、遊びこそ生活文化
――日野市で豊かに生活する―― …… 46

井口　眞美　本学生活文化学科 准教授

講話②

発達障害児と地域で暮らす
――生活の中の心理支援―― …… 56

長崎　勤　本学生活文化学科 教授

暮らしをとらえなおす

日野の保育と教育

生活科学部の四学科が、各分野において話し、学びあう公開市民講座。生活文化学科では、幼児保育と生活心理についての二つのテーマを軸に、「暮らし」について地域の方と共に考えていく会を企画しました。

はじめに

松田　土曜日の午後、こうしてお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。平成二十七年度 実践女子大学 公開市民講座の第一回目となります。生活科学部生活文化学科の企画でございます。初めて、ここイオンモール多摩平の森で開催をすることになりました。

実践女子大学の日野キャンパスができ、今年でちょうど五十年を迎えます。半世紀の間、この日野の地で実践女子大学は歩んでまいりました。昨年の春には、文学部と人間社会学部が渋谷キャンパスのほうに里帰りいたしましたが、生活科学部は、引き続きこの日野の地に根を張り、新たにキャンパスづくりを

進めているところです。私ども生活文化学科では、昨年、新しく生活心理専攻ができました。そして幼児保育専攻と、新しい生活心理専攻という二専攻の体制で、この春、生活文化学科誕生から二十年の節目を迎えました。十一年前に幼児保育専攻ができ、私自身はその前年に着任いたしました。それ以来、日野市の皆様には、保育者・教員養成で実習その他、本当にお世話になってまいりました。

そして、この日野の地というのは子どもたちが育つのにとてもいいところだな、とつくづく感じてまいりました。保育・教育の場もそうですけれども、いろいろな子育て支援の取り組みがあって、何よりも、地域で子どもたちを育てていこうという雰囲気があります。毎年、私たちの学科で参加させていただいている「手をつなごう・こどもまつり」などはそのあらわれであると思います。そのような日野の地で、保育者や教員の養成ができるというのは本当に幸いなことと感じております。また、新しくできました生活心理専攻でも、地元日野市でフィールドワークを実施させていただいております。これからまた、新たな出会いや学びがあることと大いに期待しています。

このように日野市とのつながりを持ちながら、学生教育を行っております生活文化学科ですが、本日は、「日野の保育と教育」というテーマで講座を企画いたしました。最初に学生による楽しい企画もございます。有意義な時間をお過ごしいただければと願っております。最後まで、どうぞよろしくお願いいたします。

本学OG及び在校生による
パネルシアター上演

パネルシアター同好会OG及び在校生が、公開講座のはじめに、パネルシアターを上演してくれました。パネルシアター同好会は、まだ設立四年目の同好会ですが、日野市を中心とした幼稚園、保育園、児童館等で公演活動を精力的に行っています。

この日は、五つの演目が上演され、参加者の大人の方もお子さんたちも楽しいひと時を過ごすことができました。

演目

「はじまりの歌」

「どうぶつむらのひろば」

「はたけのお花」

「ぶたくん 街道を行く」

「すてきなお手紙」

司会　パネルシアターの皆さん、ありがとうございました。いつも大学で見ていますが、いつも以上にすてきに見えますね。ちなみに次の公演はいつですか。

部長　次は、十月十八日に、少しここからは遠いですけど聖蹟桜ヶ丘の公民館で「多摩人形劇まつり」というのがありまして、そこで、他大学のパネルシアターサークルと一緒に公演をさせていただきます。よろしければお越しください。ありがとうございました。

また、十一月七日（土）、八日（日）に、日野キャンパスで常磐祭という学園祭があり、午前と午後であわせて二公演を行います。そちらもよろしくお願いいたします。

子どもにとっては、遊びこそ生活文化
――日野市で豊かに生活する――

本学生活文化学科 准教授
井口 眞美

司会 続きまして、井口先生からお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

井口 皆さん、こんにちは。実践女子大学生活科学部生活文化学科の井口眞美と申します。三十分ほどお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ただいまごらんいただいたパネルシアターですが、学生たちがとても頑張っている姿をぜひ皆さんに見ていただきたいと思い、こういう公演の場を設けさせていただきました。ポロシャツを着ているのが一、二、三年の大学生、そして私服を着ている二人は、現役の幼稚園教諭、保育士として頑張っている元学生、OGです。本日は、すてきな楽しい公演を見せてもらいました。

本日は、「子どもにとっては、遊びこそ生活文化――日野市で豊かに生活する――」というテーマで、子ども、特に幼児期にとっての遊びの大切さと、そして、この日野という地域のすばらしさを皆様に再確認していただければと思っております。

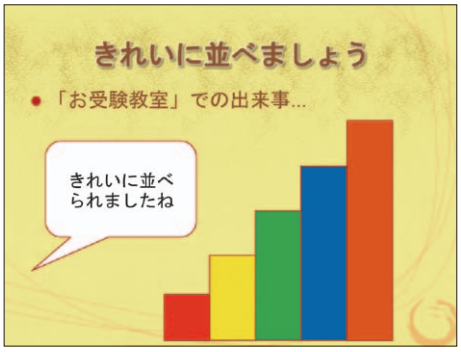
この写真は、立日橋の上から私が撮った春の富士山です。私

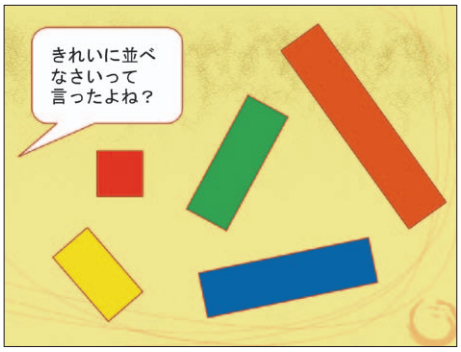
は、実践女子大学に着任して四年目になります。実践女子大学は日野駅から歩いて十二分、大坂上にあります。中央線で通っておりますが、今年の春からは、日野駅ではなく一駅前の立川駅で電車を降りて、そこから自転車で三十分かけて通っております。猛暑の時期、そして雨の時期はちょっとお休みしていますが、また秋に向けてそろそろ復活しようと思っているところです。その途中の立日橋から見える富士山に感動し、そして、ここから実践女子大学に向かう途中、なかだの森のスポーツ公園の桜が本当にすてきで、春にその桜に心を打たれて以来、自転車通勤を決めました。

日野のお話の前にちょっと、私の学生時代のエピソードについてお話をさせていただきたいと思います。保育・教育の教員になりたいとずっと考えていた私は、大学生時代、保育園や児童館のアルバイトだけでなく、都心の繁華街にある二十四時間体制の劣悪なベビーホテルで保育のアルバイトをしたり、あるいは二十三区内の幼児対象の受験教室で指導アシスタントをしたりしました。もちろん、私の学生時代ですからずっと前のことですが、いまでも忘れずにいようと心に刻み続けてきたエピソードがあります。その受験教室で、子どもたちは、小学校のような一人一つの机に座って、先生から出される課題に取り組んでいました。その日、五色のカラーテープが机に配られ、先生は、「では、配られたテープをきれいに並べましょう」とおっしゃいました。

二十人ほどいた子どもたちは、それぞれ、右から左へ短い順にテープを並べたり、あるいは、これを九〇度反転させた形で、横向きに長い順に階段状に並べたりしていました。一人ひとりの机を見回りながら先生は「よくできましたね、きれいに並べられましたね」とお話しされていらっしゃったんです。

ところが、その中で一人だけ、このように不規則に五色のテープを並べた子どもがいました。そして並べ終わって、その子は自分が並べた五色のテープを見て、手をパチパチと小さくたたいて「きれい」とつぶやいたんです。その子は、「きれいに並べましょう」という先生の指示に対して、自分の机一面をキャンバスに見立てて、抽象絵画のような絵を描き出したのです。五色のテープは本当に「きれいに」並べられていました。





ご想像に難くないと思いますが、それをごらんになった先生は、「きれいに並べなさいって言ったよね」とその子に対して注意をされました。もう小学校に上がろうという時期の五歳児ですから、その男の子は、周りのお友達の様子をのぞき込んで、「あ、何か間違ったな」と状況を察知し、階段状にテープを並べ直しました。

私はこのエピソードをずっと忘れずにいようと思い続けてきました。大人の枠組みにはめ込むことが教育ではありません。この課題も、きれいにではなく「長い順に」、子どもにわかりやすい言葉にするならば「背の順に」と伝えるべきだったのです。子どもならではの感じ方、感性をつぶさない、そんな先生になりたいと学生のときに思ったエピソードをご紹介させていただきました。

そしてもう一つ、やはり同じ教室での出来事ですが、子どもって、こんなふうに見たり聞いたり感じたりするんだなと思ったエピソードに出会いました。

受験に向けて、子どもたちには面接の練習という時間がありました。担当の先生がある男の子に向かって、「あなたの幼稚園の園長先生のお名前は何ですか」という質問をされました。男の子は即座に「えんちょうしきじ」と答えました。先生もわからない。横にいたアシスタントの私も、あれ、何て言っているのかな、しきじ先生というお名前かしら、と思いました。先生はその子に確認をされたのですが、男の子は首を横に振って、「えんちょうしきじ」と繰り返しました。

もちろん、この「しきじ」とは園長先生の名字でも名前でもありませんでした。式典で司会者の先生が「園長式辞」と言うたびに登場するのが、この園長先生だったわけです。幼稚園のシステムは園それぞれなので、子どもとたっぷり遊ぶ園長先生もいらっしゃいますが、式典のときだけ子どもたちの前に顔を出す園長先生もいらっしゃいます。その男の子は、きっとそんな幼稚園から来たのだと思います。園長先生といえば、いつも「園長式辞」という言葉と共に登場する。だからこそ、「先生のお名前は？」と聞かれて、こんな答え方をしたのですね。でもこれこそ、本当に子どもらしい見方、感じ方だなと思っております。

いまの二つのエピソードを受けて、私自身が考えてきた、幼児教育の中で大切にしたいことのポイントを幾つかお話しさせていただきたいと思います。

まず、「答えは一つではない」。「クローズな答えではなくてオープンエンドな答え」を探し求める、そんな学習を常に幼児期そして小学校の時期は続けてほしい。そういう環境を用意する教員であってほしいと考えております。

次に、「子どもの、子どもならではの感じ方をつぶさないこと」。先ほどの二つのエピソードもそうですが、子どもには大人とは違った子どもの目線での見方、感じ方というのがあります。そういったものをつぶさない。そのことを、家庭も、そして幼稚園・保育園でも必ず守っていきたいものです。

三つめには、「五感を使った実体験を伴う生活の保障」。幼児

期ならではの、体をめいっぱい動かして五感を使い、そして、そこから体験して得られるもの、生活の中で得られるものの中にこそ、子どもの本当の力というのは育っていきます。子どもたちは記憶力がいいので、知識を覚えさせようとすれば、すんなりと覚えていきます。でも、子どもに頭だけの知識を植えつけるだけでは、本当の意味でのしっかりとした知識とはなりません。実体験を伴い、そして、子どもの生活に根差した学びを大切にするべきだと考えています。

四つめは、「知識は、興味関心を育むことから」です。もちろん知識を得ることがいけないわけではありません。ただ文字の読み書きの指導にしても適時性がある、ということをしっかり頭に置いていただきたいのです。小鳥の声や流れる水音等に耳を傾けたり、お友達と一緒に、「見つからないといいな」「でも誰も見つけてくれなかったらどうしよう」と思いながら、どきどきしながらかくれんぼうをしたり、また、家族と行った多摩動物公園で見た、強くて怖いライオンの絵をクレヨンで画面いっぱいに大きく描いてみたり……、こういった五感をたっぷりと使ったたくさんの実体験によって、感覚・感性は育まれていきます。そこから、もっとやってみたい、もっと知りたいという興味関心がエネルギーとなって、そこで初めて知識が積み上がっていくわけです。子どもの興味関心が支えとなって、例えば、遠くに住むおじいちゃんにお手紙を書きたいなという思いが、文字の獲得へと続いていくわけです。

それと五つめ、どれだけ知識があるかよりも、「さまざまな人間関係の中でその子らしさ、その子の力が発揮できるか」。個人で学ぶことも大切ですが、やはり社会に出たときに、知識以上に、さまざまな人間関係の中で、自分らしさ、力が発揮できるか。社会で出会った問題に対してどれだけ解決する力があるか、という点を幼児教育の中で育てることが問われているのだと思います。

こういった力を育てたいという思いをもって日野という地域を見回してみますと、本当に豊かな自然に恵まれていて素晴らしいと感じます。では、豊かな自然の中での遊びというのがなぜいいのかについて、幾つか挙げてみたいと思います。

まずは、「一人ひとり自分のしたい遊びが選択できること」。広い自然の中で、何をやっても何で遊んでもいいよという環境の中で、一人ひとりが自分のしたい遊びを選択でき、また、その子なりの、いろいろな遊び方、やり方が楽しめること。これは、自分で課題を発見し学習を進めていくという小学校以上での学習の姿勢としても、とても大切なものです。

そして、「自然の中で五感をフルに使って遊べる」。また、「納得がいくまでじっくりと取り組んだり、仲間と協力しながら物事を進める」知的な遊ぶ力というのが、豊かな自然の中では育まれていくと考えております。

私自身が最近、日野の地域についていろいろと勉強させていただく中で感じた日野のいいところとして、いまお話しした豊かな自然の中で遊べるという点と、もう一つ、日野に生活する大人たちが、とてもすてきな活動をしていて子どもを支えて

いる、ということです。私が学生と一緒に参加させていただいた日野で行われている活動を、ここで紹介させていただき、日野が子育てをしていくうえで本当にすばらしい場所だということを感じていただければと思います。

その前に、お母様もいらっしゃるので、子どもの育ちを支える大人の役割という面から見ても、いまお話ししたような日野の大人の方たちは、とてもすてきだな、憧れるな、と思えるということをお伝えします。もちろん大人の役割にはいろいろあるのですが、ここはぜひ心がけておきたいポイントとして、本日は二つだけ挙げさせていただきます。

まず、子どもに間違いや失敗を恐れない前向きさを育みたい、そんなときに、「違うでしょ」「だめ」といった言葉の連発は子どもを萎縮させます。先ほど言ったクローズエンドな結論だけを求める。それももちろん同じです。「これもいいね」「そんなやり方もいいね」と認めてあげること。そういった姿勢が子どもの前向きさを育んでいきます。

では、否定しなければいいのか。そうではないですね。子どもの主体性を育むために実は褒め過ぎてもいけません。なぜかというと、子どもは、お母さんのことが大好きです。お母さんに褒められたいからやる。自分がやりたいからではなくて、お母さんに褒められたい、だから頑張るという「いい子」こそ過剰適応な態度が育ってしまいやすいんですね。ですから、子どもに上手な距離感、スタンスを持ってかかわっていかれる大人たちでありたいと日々考えております。

では、本日、ご本人もいらっしゃっているのでご紹介させていただきます。NPO団体「子どもへのまなざし」主宰の中川ひろみさんです。

（中川ひろみさん挨拶）

中川ひろみさんは、先ほど私が言った「とってもすてきな大人」の一人でして、野外保育「まめのめ」や冒険遊びの場「なかだのもりで遊ぼう」といった活動をされています。

これは、七月に浅川で幼児たちが川遊びをしている写真です。うちの学生も参加し、お手伝いをさせていただきました。子どもも大人もライフジャケットを着て浅川に入っていきます。

この日は、ちょうど朝の集合時、小雨が降っていたんですね。それで、十五人の参加申し込みがあったのですが、私はどちらかというと心配症なので、みんな参加するのかな、来ないんじゃないかな、なんて思っていました。でも、日野の親子の皆さんは非常にたくましくて、十五人全員が参加されました。雨上がりで水かさも多く、川遊びに慣れていない私は、岸でちょっとどきどきしながら見学をさせていただきました。でも子どもたちは、たくましく向こう岸に渡ったり、大人と一緒に手をつないで川をぷかぷかと浮いてみたり、魚のいる場所へ行って網で魚を捕まえたりしていました。こんなふうにみんなで手をつないでぷかっと川を浮いて、少しの距離を流されることを楽しんでいました。

こういった中で、子どもたちは水の冷たさを感じ、また

ちょっとスリルを味わい、体全体、五感をいっぱい使って、泳ぎ、歩き、育っていくんだなと、本当に感動しながら見させていただきました。また、仲間同士とのかかわりの中で、子どもたちは「あ、こういうときには自分勝手な行動をしちゃいけないんだ」ということを、一つずつ覚えていくのだと思います。

この「子どもへのまなざし」の活動と、もう一つ、この夏には日野の用水で行われている活動にも参加させていただきました。こちらは、日野宿発見隊という、日野にお住まいの方々が主催する用水での水遊びの会でした。これも学生と参加させていただいたのですが、用水に入った学生やスタッフの方々が大きい網を構えておりまして、そこに子どもたちが小さい網で魚を追い込むんですね。日野の用水には、オイカワとかカワムツといった魚がいたり、とっても美しいハグロトンボを見たりすることができました。

このヤゴはいま、カナダモという外来種の藻につけて繁殖をさせていること、また、日野の用水の土手はコンクリートになったことでホタルが育たなくなってしまったことといったお話を、日野を愛する方々からたくさん伺うことができました。

このときにすてきなエピソードがありました。このイベントでは、生き物を観察した後、魚たちはみんな用水に戻してあげるんです。「お魚を戻しましょう」とスタッフの方がおっしゃったのですが、このイベントに参加していた高学年の男の子三人

は、魚釣りをしたくて来るぐらいですから、逃がさなかった。「逃がしたくない」と頑として魚を戻さず、そして、そのままこそこそと逃げるように帰ってしまったんです。

その後、残った人たちは、交流センターでおやつを食べたりお土産をいただいたりして解散したのですが、スタッフが片づけをしているときに、逃げた三人のうちの一人が、お母さんと一緒におわびに戻ってきてくれたんです。お母さんは、「子どもから話を聞いたら、活動の途中でごあいさつもせずに帰ってきてしまったと言っております。申しわけありません」と言ってくださいました。本当にすてきなお母さんだなとは思いましたが、男の子は申しわけなさそうな顔をしていました。魚を逃がしなさいと言われたのに逃がさないで帰ってしまったことは、お母さんにきっと言っていないな、と感じました。

私はスタッフの方にあとでこそこそと「あの逃げた三人の男の子のうちの一人でしたね」と話したんですね。そうしたら、そのスタッフのおじさまは、「ああ、どうしてもね、やってみないとわかんないんだよねえ。俺もそうだったけど、川の魚はね、絶対に育てられないんだよ」。こんな言葉を聞きまして、こうやって日野に住む大人たちが日野に住む子どもたちに文化を伝えていくんだな、とそのすばらしさを感じました。この日は、ちょっと心温まる場面を見せていただきました。

また、そのほかにも市内の幼稚園ではすてきな取り組みをいろいろされています。本当に一端しかご紹介できませんが、これは今年、市の協力も得ながら熱心に取り組まれている「生ごみから土づくり」という活動です。家庭にある生ごみを持ち寄って、みんなで生ごみから土をつくっていきます。子どもたちは、家庭から持ち寄った生ごみを細かくちぎりまして、そこに発酵させるもとになる米ぬかぼかしを混ぜ、土に混ぜ込んでいきます。空気を上手に入れて混ぜ込んでいくと、一カ月ほどでよい菌、「菌ちゃん」という名前がついていましたが、菌ちゃんが発酵して豊かな土になっていきます。日野市内のそれぞれの幼稚園では、この菌ちゃんを使って、この後、コマツナ等の野菜を育てていきます。

今回、吉田先生という方が講師としていろいろな幼稚園を回って、菌ちゃんづくり、土づくりの講義をしてくださったのですが、「農業界のきみまろ」とご自分でおっしゃるぐらい、本当におもしろい方で、子どもたちの興味を引きつけながら土づくりについての解説をしてくださいました。ニンジンの皮にはポリフェノールが中身よりも四倍含まれているんだよとか、みんなが捨ててしまうタマネギの根っこのところ、成長点には一番栄養がたっぷり入っているんだよ、といったことをお話ししてくださいました。

また、子どもたちが持ち寄った生ごみをパクッと口に入れて、もぐもぐもぐと食べてしまって、「おじさんはね、生ごみを食べても大丈夫。おなかにいい菌がいっぱいいるからね」なんて言って、子どもを驚かせながらお話を進められていま

した。

日野市は、段ボールコンポストで生ごみを最小限に減らす取り組みをしていますが、「生ごみではなく、それは食べ残しだ」というお言葉も私の心の中に残りました。生ごみではなく食べ残し、その食べ残しにも命があり、そして菌にも命がある。そこから育つ野菜にも命があって、それをいただく人にも命がある。このように人間というのは命の循環の一つであるということを、しっかりと実感しながら子どもたちも育っていってほしいと、吉田先生は熱く語っていらっしゃいました。

この米ぬかぼかしのにおいをかいで、「臭い」「気持ち悪い」と言う子もたくさんいました。でも毎年回数を重ねているので、「これはおみそのにおいだよね」と発酵のにおいというものをしっかりと感じ取っている子どももいました。こうしてでき上がった米ぬかぼかしの入った土は、一カ月ほど様子を見ながら置いておくと、とても元気な野菜が育っていくのです。

また、吉田先生は、「夏に元気な野菜と冬に元気な野菜をしっかりと食べ分けることも健康になるコツだよ」とおっしゃっていました。スーパーに行けば、一年中同じ野菜が売っている時代ですが、夏に元気な旬の野菜、そして冬に元気な旬の野菜を我々大人もしっかりと区別をしながら、子どもたちと一緒に食べていく必要があると改めて感じました。

この活動を支えている佐藤さんという方がいらっしゃいますが、その方の活動に「せせらぎ農園」というコミュニティー農園

があります。二百軒ほどのお宅から生ごみを回収して堆肥としてリサイクルしています。第五幼稚園でたくあん用に使われる大根を育てたり、また、サツマイモ掘り用のお芋を育てたりという形で、みんなで農園を耕して、子どもたちに還元できる物、地域の人たちに役に立つ物をつくっている活動です。ぜひ皆さん、関心のある方、一度ごらんになっていただければと思います。

このトウガンも先日もらってきた物なのですが、「せせらぎ農園」では、たくさんの作物を育てており、家庭の方々もちょっとした時間を使って参加し、みんなで作物を分け合えるシステムになっています。

このように、いろいろ自然体験の場がある日野市ですが、最後にちょっと、実践の学生たちの頑張りとして「日野の昔話や文化を知る」活動のお話をさせていただきたいと思います。今回、日野市役所のお力も借りて、日野にある昔話を収集して、パネルシアターとして作品化しました。市政図書館、市立図書館といった、学生もいままではちょっと縁遠かった場所に足を運び、昔話を収集して、視覚的にわかりやすいパネルシアターにして、幼稚園・保育園、児童館で公演をさせていただく運びになっております。

この写真は、日野の歴史に精通されているご高齢の方からお話を伺っている場面です。作成したパネルシアターを見て、内容的に誤解はないか、飛躍し過ぎているところはないかなど点検をしていただいているところです。こうしてつくられ

たパネルシアターは、改良を重ね、学童クラブで発表することになっています。こういった高齢の方々との出会いも、学生にとってはとても貴重な体験になっております。

昔話の内容を少し簡単に説明させていただきたいと思います。日野の旧四谷地区の集落では、ウナギを食べないという教えを守り続けている方々がいまでもいらっしゃるそうです。なぜかというと、昔、大雨が続いて、多摩川が氾濫したときに、たくさんのウナギが泳いできて、土手にできてしまった穴を塞いで土手が崩れるのを守ってくれたという言い伝えがあります。この地区のご本尊様である菩薩様のお使いがウナギである、といういわれもあるそうですが、旧四谷地区に住み続けているご高齢の方々は、いまでもウナギを召し上がらないそうです。こういった日野の昔話、文化を学生たち自身も学びながら、子どもたちに伝える活動を重ねております。

幼稚園や保育園などでも和の文化に親しむということで、太鼓などの和の文化の伝承に努めている様子がたくさん見受けられます。本学でも、十一月七日の常磐祭にて、おおくぼ保育園のお子さんと実践女子大の学生がコラボで太鼓の発表をさせていただきますので、お時間があればおいでいただき、日野の和の文化に親しむ機会を持っていただけたらと思っております。

このように日野のよさを再発見していただきたい、そして幼児教育にとって、遊びを通して豊かな自然の中での活動の大切さというものを、皆さんが少しでも感じ取っていただけるお時間になることを願って、お話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

発達障害児と地域で暮らす
――生活の中の心理支援――

本学生活文化学科　教授
長崎　勤

司会　後半の部に移りたいと思います。生活心理専攻の長崎先生からお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

長崎　皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました実践女子大学の生活科学部生活文化学科生活心理専攻の長崎と申します。

最初に松田先生からご紹介いただきましたように、実践女子大学の生活文化学科に、昨年度から生活心理という新しい専攻ができました。一学年四十名の学生です。生活心理というのはあまりなじみがない言葉かもしれませんが、私たちは生活の中でさまざま心の動きがありますね。生活を豊かに過ごす中で、豊かな心の動きを育てていこうという研究です。それから、本日もお話しさせていただきますけれども、さまざまな心の問題や心の障害を持った方々も、生活の中での支援をとおして、そして生活の中で回復したり、発達・成長していく。そんな方法といいますか、あり方を考えていきたいと思っております。日本ではまだ、始まったばかりのものなんですけれども、ほかの心理学の先生方、幼児保育の先生方と協力し

ながら、新しい学問、専攻を育てていきたいと思っているところです。

本日の予定としては、三十分ほど私のほうからお話をさせていただきます。発達障害の子どもたちのことと、それから、地域の生活を楽しむツアーの例をお話しさせていただいて、その後、ちょっとワークショップを考えております。本日、ご参加いただいた皆さんと一緒に、四、五人ぐらいのグループに分かれていただいて、日野地域の方々だと思いますので、簡単に自己紹介をしていただいた後、発達に障害を持つ中学生のお子さんを、日野地域で土曜、日曜の週末に何かお楽しみのツアーを考えられないだろうか、ということですね。架空のお子さん対象なんですけれども、「こんなことだったら日野で楽しめるよ」というツアーのプランを皆さんで考えていただいて、時間があれば、発表していただくというようなことをできたらしたいなと思っています。人数もちょうどいいようですので、後でグループになっていただきたいなと思っているわけです。

井口先生からも先ほどご紹介があったように、日野は非常に豊かな自然と豊かな文化、また、こういう立派な商業施設も備えて、バランスのとれた地域かなと思います。その中で、豊かな心を育てるための豊かな生活って、一体どんなことなんだろうか。後でお話ししますけれど、週末というのは、障害を持った子どもたちにとっては、どうやって過ごしたらいいかということを悩む時間でもあるんですね。そんな時間を地域の人たちと共に豊かに過ごす、アイデアづくり、アイデアの紹介、そんな場になったらと思いますし、これを機会に、本日集われた方々もお知り合いになっていただいて、これから、いろいろな日野での活動のパートナーになっていただければと思います。初めての試みなのでうまくいくかどうか自信がないですが、協力していただきながら一緒につくっていけたらと思っていますので、よろしくお願いいたします。

それで、最初の話ですけれども、皆さんもいろいろなところでお聞きになっていると思いますけれども、気になる子ども、発達障害のお子さんたちが、この十年ぐらいの間に非常にふえているということが、いろいろなところでいわれていると思います。その中で、発達障害のお子さんたちについて、新聞やテレビ等でもよく目にすることだと思うんですけれども、実は、発達障害といってもいろいろなお子さんがいらっしゃいます。

大きくは三つぐらいのタイプのお子さんたちなんですけれども、一つは、学習障害といって、ほかの教科はとてもできるんだけれども、算数だけが苦手だな、とか、あるいは読み書きだけが苦手だな、とか、そういうお子さんたちです。

それから注意欠陥多動性障害、略してＡＤＨＤということが多いですけれども、何だかじっとしていられないというお子さんたち。典型発達のお子さんですと、三、四歳ぐらいまではみんな多動なんですけれどね。年中から年長にかけて自然と落ち着いて、二十分ぐらいは先生の話が聞けるとか、みんなと協

力して何かできるというふうに成長していくんですけれども、小学校に入ってからも、授業中になかなかじっとしていられなくて教室から出てしまうとか、しっかり人の話が聞けないとか、そういう特徴を持ったお子さんたちです。

それから自閉症スペクトラム、自閉症というお子さんたちです。いま、ＡＳＤという略称で呼ばれることが多いですけれども、人とうまくコミュニケーションができない、会話ができない、それから遊べない。ほかの子どもと上手に遊べない、というお子さんたちです。

いずれも知的な能力は割と高いお子さんが多いですけれども、集団活動がうまく送れないとか、人とうまくかかわれないという特徴を持ちます。この子どもたちがとてもふえているということで、文部科学省が最近した調査では、大体、小中学生の六パーセントですね。ですから、一〇〇人いると六人、三十名の学級だったら、二人三人のお子さんがクラスにいるということなんですね。いま、ふえています。

これ以外にも気になるお子さんというのは、発達障害は持っていないんだけれども、いろいろな家庭の問題であるとか、そんなことでなかなか落ち着いて勉強ができないとか、お友達とすぐけんかをしてしまうという、そういう気になる子どもというのも、この六パーセント以外にもふえていまして、大体、クラスを訪問させていただきますと、一〇～二〇パーセントがこの発達障害か気になるお子さん。クラスに三人四人はこういった支援が必要なお子さんがいる、というのが現状です。学校だけではなくて幼稚園・保育園もそうですね。クラスに二人三人はケアが必要なお子さん、支援が必要なお子さんがいるということで、障害の専門家だけでなくて、通常の幼稚園・保育園の保育士さん、それから小学校の先生たち、中学校の先生たち、みんなで協力してこういうお子さんたちの育ちを支援していかなければいけないと、そういう時代になってきております。

少し障害のことも知っておいていただいたほうがいいと思いますので資料を用意しましたけれども、学習障害に関してはこんな定義がされています。全般的な知的発達におくれはないが、聞く、話す、読む、書く、計算するまたは推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す、と。

聞いてわかる力、あるいはうまくわかりやすく話す力、それから文字を読む力、文字を書く力ですね。あるいは計算する力という、特別なそういう技術やスキルのいるものが苦手だというお子さんたち、というのが定義になっています。

ＡＤＨＤのお子さんの教室での特徴は、先ほどもちょっと言いましたけれども、席にじっとしていられないとか、ほかの人が話しているときについ割り込んでしまうとか。それからケアレスミスが多い、計算のミスが多いとか、漢字のはねるところを忘れてしまうとか、最後が雑だとか。それから、校則が守れなくてつい破ってしまう、宿題を忘れたり、持ち物を忘れたり、最後までやれなかったり、口頭での指示に従えなかったり、というようなことで、特に学校では授業の中で困難をきたすとい

うことが多いわけです。

自閉症のお子さんは三つの特徴で説明されています。一つは、社会性ですね。みんなと遊べない、みんなと協力ができない、といった社会性。それから会話がうまくできない、人とおしゃべりして楽しむことができない、とか。それから想像力ですね。ごっこ遊びが苦手だ、とかですね。さっきのようなパネルシアターなんかを見ても、結構デフォルメされているわけですね、登場人物とか。一体、何なのかというのがよくわからない。そういうイマジネーション、想像するのが苦手だというようなことですね。そういう特徴を持ったお子さんで、少し前までは、高機能自閉症とか、アスペルガー障害とか、そんなふうにして区別していたのですが、昨年診断基準が変わりまして、一括して自閉症スペクトラム障害（ＡＳＤ）というふうに呼んで、特徴ある子どもたちを、こんなふうに捉えてみんなで支援していきましょうということになったわけです。

そういう発達障害のお子さんたちに対して、世界中で、また日本でも、教育システムが整備されてきていますので、これもぜひ知っておいていただきたいと思います。いろいろな場が用意されているということですね。

一つは、通常学級で過ごしながら担任の先生の配慮を受けて教育するということですね。ですから、ずっと普通学級にいて教育を受けたり活動をするというお子さんです。

もう少し障害がはっきりしてくると、通常学級にいながら、通級指導学級という、学校の中にある歯医者さんのようなクリニックに週一回とか二回通って、一回一時間とか二時間通ってそこで特別な教育を受けるという、そういう教育の受け方です。日野市はこの制度が充実しているかと思います。ですのでほとんどは通常学級にいるんですけれども、月曜の三限だけ、あるいは金曜の四限だけという形で、その学級に通って特別にその子に合った教育を受けます。

それから、もう少し障害が重いお子さんには、特別支援学級というのが用意されておりまして、そこでほとんどの時間を過ごして教育を受けますが、給食とか、体育とか、美術とか、その子の得意なところでは通常学級に行ってほかの子どもたちと一緒に教育を受けるというような教育の仕方です。

さらに障害の重いお子さんには、特別支援学校という、昔は養護学校といっていたわけですけれども、障害を持っている子どもだけが集まった学校というものが、幼稚部、小学校、中学校、高等部というものがあります。

こんなふうにいろいろな教育のシステム、ルートがありますので、そのお子さんの障害の性質や重さに従って、主に保護者の方々が選べるようになっているんですね。昔は「こういう障害だったらここに行きなさい」とか「こういう重さだったらここに行きなさい」と、むしろ指導されていたわけですが、いまは保護者の方々がこれを選択する。お子さんの様子に合わせて「どこが適切かな」ということで選択できる。そういう時代になってきているということですね。こういう複数のルートがあるということを、一般の市民の方々もぜひご理解いただけたら

というふうに思います。

さて、そういう障害を持ったお子さんたち、特に発達障害のお子さんたちは、知的な能力が高いので、だんだんと自分のことがわかってきます。自分のことに気がつきます。それは、時期的には小学校の中学年から高学年ぐらい、四年生、五年生、六年生ぐらいにかけてですね。「どうも何か僕はほかの子と違うな」「僕ばっかりいつも先生から注意されるな」とか、「僕は何かほかの子に比べて忘れ物が多いな」「僕は漢字が不得意だな」。自分がほかの子と違うことに気づいていきます。あるいは、「何かほかの子が僕のことを避けているな」「僕は嫌われているんじゃないだろうか」といったことにも気づいていきます。実際、友達が少なかったり、いなかったりするということですね。

そういうことからだんだんと自信や自尊心をなくしたり、「何か僕ってだめなんじゃないだろうか」とか、「僕って何で生まれてきたんだろうか」とか、そんなふうにして自分というものをネガティブに捉えがちになってきてしまう。ほうっておくとそんなふうになっていってしまうということなんですね。そしてさらに、だんだんと「学校に行きたくないや」とか、「教室に入りたくないや」なんていうことになったり、あるいは、ひどい場合には非行に走ってしまったりとか、そういうことも起こってきてしまいがちです。ほうっておきますとですね……ほうっておく、つまり適切な支援を受けないと、不登校になってしまったり、こもりぎみになってしまうというわけです。

といいますのは、典型発達のお子さんは小学校の高学年ぐらいから、子どもだけの世界を持ちます。つまり、幼児期から小学校の低学年ぐらいは、お父さん、お母さんと一緒に遊んで土日もお出かけしていたのが、だんだんと友達同士誘い合って、「土曜日、多摩のイオンモールに遊びに行こうよ」とか「映画を見に行こうよ」といった子どもだけの、ある意味で閉じた世界ですね。親が何か聞くと嫌がるわけですね。「きょう、何して遊んだの」「いいじゃん」とか、話すのを嫌がったり、そういう子ども同士のつながりがすごく強くなってくるわけですね。週末誘い合ってお出かけしたり、買い物に行ったり、映画を見に行ったりということで。

先ほど、私もイオンモールのフードコートでお昼を食べたんですけれどね。中学生の女の子二人が、ちょっとおしゃれして何かおいしい物を食べたりしていました。そういうことを友達同士ですることはとても楽しいし、週末の一つの過ごし方になるわけですね。お小遣いを持って、中学生でも買えるちょっとした洋服を買いに行ったり小物を買ったり、そういう楽しみ。あるいは近くの遊園地にみんなで出かけたり、あるいは博物館に出かけたりという、大人から自立して大人の目に触れない自分たちの世界をつくっていく、ということの楽しさというものを味わっていくわけですね。これが大人に向けての自立のプロセスなんだと思うんですけれども。

それに対して発達障害の子どもたちは、先ほど言いました

ように友達が少ない、いない。でも、ウィークデーは何とか学校に行って授業を受けたり部活をすれば、友達と会う時間はあるわけですけれども、結構大変なのは週末なんですね。部活のある日はいいですけれど、部活のないときなんかは、あまり出かけないで家にこもりがちになって、ゲームばかりやっているというようなことになりがちなわけです。そんなことが続いてくるとやはり、「何かおもしろくないな」「人生っておもしろくないな」「生きていくっておもしろくないな」なんていうネガティブなほうに行ってしまいがちなわけですね。

それと、もう一つ重要なこととして、自発性の欠如の問題というのがいま、いろいろなところで話題になっています。つまり、いつも誰かに何かをしてもらう、世話をしてもらう、援助をしてもらうという経験が積み重なって、自分は何をしようとしているのか、何のために生きているのか、そういう意味がよくわからなくなってしまうんですね。そういうことが積み重なっていくと、学習性無力症（learned helplessness）、そういう症状、だんだん無気力になってしまうんですね。引きこもってしまうということが起こりがちなんです。自分でこうやろうと思って計画して、やって、おもしろかったな、という経験がなくなってしまう。いつも、「やりなさい」「こうしなさい」ってね。周りは善意からなんですけれども、いつも誘われてそれに従っていくというような傾向になってしまいがちなんです。

それと、先ほど言いましたように、典型発達の子どもたちは小学校の高学年から自分たちの世界をつくり上げるというところで、自発性というものは育っていくわけですけれども、発達障害のお子さんたちは、そのチャンスをある意味で奪われてしまいがちなんですね。そのことがいろいろな問題を引き起こすということです。こういった子どもたちの、自分で考え、プランし、自分の意思で動き、また振り返る――これ楽しかったな、これちょっとうまくいかなかったよね、失敗だったよね、じゃあこうしようか――そういう力ですね。そんな力を、幼児期の後半ぐらいから小学校、中学校ぐらいにかけて育てていくことで、後々の社会参加とか働く力とか、そういったものになっていくといわれているわけです。ですから、多少の間違いやトラブルがあったとしても、自分で考え、プランし、自分の意思で動いて、振り返る。そういう経験をいろいろなところでしていく。そういうことを支援することが必要だし、そういうことができるのが地域の場なんだろうな、というふうに思います。

それで、その実践例を本日はご紹介させていただいて、後半に皆さんで、日野の地域で一体、何ができるか、そんなことを考えていただきたいと思います。

私、いま日野市には住んでおりませんで東のほうから通ってきているわけで、この例は海岸沿いのある町の例で恐縮なんですけれども、一つの例としてお考えいただきたいと思います。登場するのは中学校一年生の、昔は高機能自閉症といった二人の中学生の男の子です。知的な能力は高いですけれど

も、やっぱりクラスでうまくいかないとか、おもしろくなくてひきこもり、不登校ぎみになっています。通級指導学級には週一回通級していました。それで、通級指導学級の先生と相談して、土曜日にお出かけツアーを考えたらいいんじゃないか、そういう計画を中学生と考え実行してみよう、ということで、大学生のお兄さんが一人、ボランティアとして参加してくれました。

通級指導学級の先生と相談してツアーのプランを立てたわけですけれども、ある駅で待ち合わせて、近くに有名な干潟があるんですけれども、そこに行って野鳥を少し観察しようか。その後、歩いていける大型ショッピングモール、イオンみたいな元祖のショッピングモールが海岸沿いにありまして、そこで三時間ぐらい。待ち合わせてから、大体、お昼を挟んで三時間ぐらいのツアーを考えよう。何と、家族以外とのお出かけは初めてだったんですね。友達と出かけたことというのはいままで一度もないというお子さんだったということです。それで不登校ぎみだったわけで、もちろん、ですから誘い合っていく友達もいなくて、お出かけといえば家族とだけ時々買い物に行くということで、友達同士で計画して、相談し合って買い物をして楽しむ、というような経験がなかったお子さんでした。

それで駅で待ち合わせて、干潟にある、市のいろいろな施設で、双眼鏡を借りたり、鳥の図鑑を見たり、図鑑とマッチングしたり楽しい時間を過ごして、それから十五分ぐらい歩いてショッピングモールへ行って、ふだんマックのハンバーガーは食べるでしょうけれど、ちょっと上等なハンバーガーでも食べようか――イオンにも、さっき見たらちょっと高級なハンバーガーがありましたね、ハワイアン何とか何とかってね――八五〇円とかそのくらいの、マックに比べると大分高いですけれども、ちょっと上等なハンバーガーを食べようか、なんていう計画でした。

大分楽しんでツアーができたんですけれども、結構トラブルがありました。例えばその上等なハンバーガーの注文では、あらかじめネットで調べていた予定の金額とちょっと違っていたんですね。その金額をカウンターで請求されたので、中学生がフリーズしちゃって、それから先に進まなくなっちゃった、ということとかですね。それから、「何とかセットいかがですか」とか「フライドポテトはどうですか」とか、いろいろな物を勧められてフリーズしちゃったんですね。そのたびに大学生のお兄さんが行って、「それは要らないよね」とか、「ちょっとお金足りないけれど大丈夫だよ」というふうにして、何とか続けられたんですね。楽しそうにしていたのですが、いろいろトラブルもあったので心配していたんですけれども、家に帰って、家族に「とても楽しかった」というふうに話したそうです。

その日の晩にすぐ電話が保護者の方からかかってきて、「すごい楽しかったんだと言っていましたよ」と。参加していたときは、そんなにいつもにこにこしていたわけじゃなかったんですけれども、こんな大学生の年の近いお兄さんや、家族以外の人とお出かけして、そういう経験をしたことはとても楽しかっ

たんだということを報告いただきました。そうしましたら、その次の週から登校をし始めたということでした。

つまり、生活ってなかなか大変なこともあるけれども、世の中には楽しいこともあるんだな、ということが実感できたかもしれないですね。これをきっかけにして登校し始めて、何とか普通高校に進学して、いま、大学か何かに行っていると思います。

これがきっかけだったのかもしれませんけれども、何かを考え実行することの楽しさ、つまり自己効力感ということですね。「自分が何かやったら返ってくるんだ」という自己効力感。人とかかわる、「初めてのお兄さんとだってこんなふうに楽しめるんだ」という、人とかかわる楽しさの実感ですね。そういうことが学ぶ意欲とか生きる意欲につながってきたんじゃないだろうか。これは私たち自身のことを考えてもそうなわけで、仕事とか、学生だったら勉強、そのこともすごく大事なことなんですけれども、やっぱりアフターファイブとか、土日どんな生活をするか。地域の自然と触れ合ったり文化と触れ合ったり、そこで結構楽しさとか効力感というものも得られていると思うんですね。そういうことが発達障害の方の場合、そういうチャンスが奪われてしまっているということなのではないでしょうか。

もう一つの例だけ簡単にお話しします。こちらのほうは、K美術館プラスA大型商店街プラン。具体的に言いますと、Kは国立西洋美術館です。Aはアメ横です。上野のアメ横ツアーです。国立西洋美術館というのは、何と、中学生は一三〇円で入館できるんですね。ほかの特別な、例えば文化の日は無料です。無料だから大したことないかというと、そんなことはなくて、国立西洋美術館には世界中のすばらしい美術品や彫刻がそろっています。有名なロダンの彫刻は入り口の所にありますし、いま特別展も来ていますが、モネのいろいろな絵があります。ですから一三〇円で相当楽しめるものなんですね。交通費はかかりますけれども、ディズニーランドへ行くよりはよっぽど安く楽しめる、そんな計画を立てました。参加者は発達障害の二人の中学生と、ボランティアの大学生二人です。

通級指導学級の先生と相談して作成したプランの中身は、美術館で自分の好きな絵を一枚選ぼう、あるいは彫刻を一個選ぼう。それと、美術館に売店がありますね。そこでそれに関連する物を一個、何か買おう。そして、アメ横周辺でお昼を食べて、アメ横で家族にお土産を買って帰ろう。アメ横のお土産ですから、割れたせんべいのこんな大きな袋を買って、羊羹の端くれとか。でも結構安いお金で、結構量があっておいしい物を売っています。そんなプランでした。

でもやっぱり、いろいろなトラブルがありました。まず集合時間ですね。駅に二つの出入り口があって、それを間違えて大学生の二人のお兄さんと会えないで遅刻してしまって、出発からパニックになっちゃったんですね。美術館では、真面目な性格なので展示の説明を端から全部読んでいたので、ちっとも進まなかったそうです。お兄さんやほかの子からはブーイングが

出たそうです。それから、美術館の売店で一つだけというのがなかなか選べなくて、すごく時間がかかったそうです。アメ横でお昼を食べたんだけれど、ここは割と順調にいってお土産も買うことができた。

帰って感想をお母さんたちに話しました。「楽しかった」「また行きたい」。家族からは、「この子がお土産を買ってくるなんて考えてもみなかった」。それは家族にとって、ものすごくうれしかった。割れせんべいの袋だったんですけれどね。いままでは、この子たちは厄介な存在、してもらう存在だったのが、家族に何か自分からお土産を持ってくる。してあげる、お土産をあげる存在になった。「この子も、そういうことを考えたり実行する力があったんですね。そのことがとてもうれしかったんです」と、家族の方がおっしゃっていました。

これが二つのツアーの例です。ポイントは、先ほども言いましたけれども、指示されて動くだけでなくて、自分で考え、プランして、選び、行動する力を育むこと。やって楽しいなと思えることですね。

普通は「この子たちが楽しめばいいな」と思いがちなんですけれど、もう一つ重要なのは、支援者というか、一緒にプランを立てたり同行する人も、一緒に活動して楽しいと思えるものでないと、大体うまくいかないですね。一緒に行った支援者が「何かつまんないな」と思っていては、多分中学生もおもしろくない。やっぱり大人の側も楽しいと思えることですね。そのことを一緒に考える。支援されるだけでなくて支援する側にも立って、いずれ、さっきの中学生なんかが、今度はボランティアでお兄さんとなって、小中学生を連れてツアーに行く。そんな日が来るとうれしいなと思うわけですけれども。

そういうことで、例が適切であったかどうかわかりませんが、豊かな日野の自然と文化、それからこういった楽しい商業施設もあるわけで、それらの中で、日野周辺の地域と自然と文化を共に楽しもう、そういうツアーを少し考えていただけないだろうか。ポイントはさっき言いましたが、ちょっとすてき、ちょっとおしゃれ、という要素が入っているということですね。最初の野鳥観察の例でいえば、「ふだんのマックじゃなくて八〇〇円ぐらいのハンバーガーを食べたいな」。我々も「食べたいな」と思いますよね、時々は、年二回ぐらいは。そういうちょっとすてきなこと。それから、美術館で何かすてきな一枚を選ぶ。それとお土産を選ぶという、ちょっとおしゃれな、ちょっと格好いいな、やってみたいな、と思うような、そういう要素を入れるといいと思います。

もう一つ、支援者も、共に楽しめるもの。それから、帰ってから家族や友人に自慢ができるといいですね。「俺こんなことやったんだぜ」ってね、自慢ができるということですね。「いいだろう」。そうすると家族や友人が、「いいな」「僕も行きたい」「私たちも行ってみたかったなあ」というような、そんなプランを考えつけたらいいですね。

私は大学生のときに聖蹟桜ヶ丘に住んでいまして、多摩地域のことは多少知っていたつもりだったんですが、先ほど、井

口先生のお話を聞くと、まだ知らないことがたくさんあると思います。本日参加された方々も、いろいろなところで活動されたり、いろいろな情報を持っていると思うんですね。「ガイドブックには載っていないけれど、こんなおもしろいところがあるよ、こんな楽しいところがあるんだよ、お金をかけなくてもこんなことができるんだよ」というようなことを提供していただいて、何かプランを立てていただけないでしょうか、ということです。

それで、一応、架空の対象者として中学校一年生の男の子を考えましょう。発達障害の二人の中学校一年生ということで。でもあまり気にしなくていいです。自閉症だとかＡＤＨＤとか障害のことは気にしないで。でも、ちょっとひきこもりぎみで、学校はあまりおもしろくないなあ、土日はテレビゲームの生活、という。家族以外とお出かけしたことはない、そんな中学生を考えてください。それにボランティアの大学生とか市民、つまり皆さんが、もしかしたら日野でもこういう活動をされているのかもしれませんが、何かの形でそういう機会があったと仮定してみてください。それで、中学生と一緒に日野で楽しめる活動は何か、ということを考えていただけないでしょうか。

土曜の半日ぐらい、きょう、こんな感じですかね。土曜の午前からお昼にかけて。天気はいいことにしましょう。予算は交通費込みで一〇〇〇円～一五〇〇円ぐらいかな。交通費とお昼代を込みでですね。中学生のお小遣いひと月分が要っちゃうかもしれませんけれど、特別ということで。この程度のことですね。お昼代、交通費、入館料、お土産代も含めて、そんなぐらいということです。ディズニーランドは今回やめておきましょう、ということですね。予算内におさまりません。

それで、一応三回集まります。一回目は、ボランティアの市民と中学生が集まって、まず顔をお互いに知る。自己紹介、簡単なゲームなんかをしてちょっと親しくなる。じゃあ何月何日の土曜日、ツアーに行こうと思うんだけれど、何がしたい。そのことを中学生に聞いてみてください。どこに行きたいかの話し合いです。ただ、なかなか出てこない可能性があります。そしたら、「こんなところもあるんだよ」「こんなやり方もあるんだよ」というプランを誘いかけてください。そこで、子どもの関心や興味を尊重しますが、ほうっておいてもなかなか出てこないので、「こんなのもあるよ」「あんなのもあるよ」「あ、これだったら行きたいな」というような形でプランをまとめていっていただきたい。パソコンの中で時刻表や施設を調べるということを一緒にやってもいいと思います。

二回目は、土曜の午前からお昼ぐらいにかけてツアーに行くということで、できれば三回目で振り返りの会が持てるといいですね。そのときに撮った写真なんかを持ち寄って、アルバムづくりをしたりお土産を紹介したりというような形で、「こんなことしたんだよ」「こんなことがおもしろかったんだよ」というのを人に伝えるということですね。自分の経験を人に伝えるということも、とても大事な力になります。

そんなことを皆さんで相談していただけたらと思います。

一応ツアープランとしては、架空的に十月の土曜日。集合時間、交通機関はどうする。目的地はどこにする。そして、さっきも言いましたが、ちょっとすてきなこと、格好いいことをその中に入れて。それからお土産。それと、予想されるトラブルとその対処、これはあまり気にしなくていいです。予想しないことが起こります。そのときは適切に対処していくしかないということで。でも、そのことであまり支援する側が落ち込んだりショックを受けないこと。当然、保険等は主催団体が掛けていくということが前提になります。ポイントとしては、支援者がすてきなことに関心を持つことが必要で、ツアーはすてきなことの共有だからですね。

ではワークショップを始めましょう。

あまり時間がなくなってしまいましたが、四、五人のグループに分かれて、十分ぐらいになってしまいますが、ちょっと何か情報交換していただけたらと思うのですが、どうでしょう。お近くの方で四、五人で固まっていただけますでしょうか。それで、私のほうで白紙を用意しておりますので、そこに簡単にプランを立てて。筆記具がない方がいらっしゃったら、言っていただければ。

時間があまりなくなってしまい、申しわけないです。十分程度で相談して、簡単に自己紹介をしていただけるといいかなと思います。

ワークショップ発表

会場（男） 案の名前はないですけれど、一応プランを考えましたので。じゃあお願いします。

会場（女） ざっくりとしか決まっていないですけれど。

幾つか案が出たんですけれど、その中で、日野市に大学があるので、大学祭に行って楽しんでこられたらいいかな、と思っていて。じゃあどこの大学にしようか、となったときに、明星大学あたりだったらモノレールに乗っていくという体験もできるので、そうしようか、みたいなところですね。あと、食べたりお土産もちょっと買ったりできるし、イベントでお笑いみたいなものも見てこられたりするのかな、ということを話しました。（拍手）

長崎 ありがとうございました。

それでは、こちらのグループ。大丈夫ですか、いいですか。じゃあお願いします。

会場（女） 私たちのグループでは、私たち自身の興味とかそういうのをいろいろと話し合っていくなかで、いろいろな場所が出て。多摩動物園だったり、昭和記念公園だったり。

長崎 お楽しみのポイントは、どういうところにありますかね。

会場（女） 本人の興味関心だったりとか。ただ、人とかかわ

るというのをあまりしていない人だったら、かかわることを楽しんでもいいかなというふうに思います。

長崎　はい、どうもありがとうございました。（拍手）

じゃあ最後。

会場（男）　いろいろアイデアが出る中で、あまりお金もかけられないところで、このイオンモール自体が非常に楽しい場所なので、こういったところで何かできるんじゃないか、音楽のイベントなんかをやっているから、そういうのに参加したら……、そんなことで、「音楽を聴こう」というテーマになりました。

その音楽なんですけれども、例えば高校の軽音楽部ですとか、合唱団さんですとか、お祭りの囃子保存会が日野市にございます。そういった方にレクチャーを受けて、太鼓をたたくというのはどうだろうかということになりました。そうするとイオンモールだとちょっと都合が悪いということで、公民館に九時集合、午前中にレクチャーを受ける。

お昼ということなんですけれども、やっぱりこれも予算の関係があるので、実践女子大のほうに行って学食を食べるということで。

お土産は何でしたっけ……、写真です。お土産は、たたいている姿を写真に撮って後で差し上げるということで。

太鼓体験ツアーでございました。以上です。

長崎　はい、どうもありがとうございました。拍手。（拍手）実践女子大の学食がおいしいかどうかぜひお試しください。ありがとうございました。短い時間ですみません。

ご意見の中にもあったと思います。実際にお子さんたちと相談してみないとわからないですが、大事なことは、その子の興味に沿うことと、私たちも楽しめるもの、みんなで楽しめるものをどうやって考えるか。考える姿勢なんです。場合によっては、社会教育の公的機関に協力してもらって、そんなふうにして日野での生活を楽しめるような、お互いに楽しむような、そんなあり方を今回考えてもいいかなと。こういう機会がもしありましたら、ぜひご参加いただければと思います。

本日は、大変短い時間で申しわけなかったんですけれども、どうもご協力ありがとうございました。またお越しください。（拍手）

司会　本日は、ご参加いただきましてありがとうございました。小さい子どもも参加してくれて、とてもうれしかったです。最後、グラウンドみたいになってね。ちょうど真ん中、周りを走り回る姿が何となく楽しそうですが、けががなくてよかったですね。

実践女子大学の生活文化学科は、地域とつながっていろいろな「実践」を行っていこうと思っています。早速、十月には「手をつなごう・こどもまつり」に参加しますし、十一月には学園祭もありますので、ぜひ皆さん、お気軽に大学のほうに足を運んでいただけたらと思います。

お手元のアンケート用紙に、ぜひご記入いただけたらと思います。また、今後の市民講座のチラシ等も前の席のほうにあり

ますので、お持ちいただきたいと思います。

本日は、長い時間どうもありがとうございました。では、これで終了したいと思います。（拍手）

Ⅲ 生活心理学生の活動

活動報告①

桜談笑会

生活心理専攻　交流会 …… 70

活動報告②

特別講義 …… 72

ミーミー・ユー　テキサス大学サン・アントニオ校
東アジア研究センター アソシエイトディレクター

桜談笑会

生活心理専攻　交流会

生活心理専攻がスタートしてから２年目を迎えた今年度、学生の交流の場として『桜談笑会』が発足しました。活動内容を報告します。

生活心理専攻二年生は第一期生ということで、授業や進路についての不安を抱えていました。一年生も前例が少ないため同じような不安を持っているのではないかと思い、二年生が一年生の相談にのることを交流会の目的の一つとしました。また、実践女子大学生活文化学科に八十名ほどしかいない生活心理専攻としての仲を深め、交友関係を築いていきたいという思いのもと、桜談笑会は企画されました。

〈運営〉　生活心理専攻二年生十名ほど
〈参加対象者〉　生活心理専攻一年生
〈場所〉　空き教室、桜ホール　など
〈日時〉　一年生・二年生の授業のないとき、昼休み

〈広告方法〉

① A4サイズのポスターを学科掲示板にて掲示

② 交流のある一年生に連絡し、誘い合ってきてもらう

③ 先生を通し授業内で告知してもらう

会では、お弁当や先生方からの差し入れのお菓子を食べながら、自由な雰囲気で話をしました。二年生と一年生が一対一ということもあれば、大勢で丸くなって話したこともありました。

第一回は六名、第二回は十四名の一年生が参加してくれました。

話す内容は

「○○という授業はどんな感じ？　履修したほうがいい？」

「○○先生のエピソード・あだ名」

「資格が欲しい。どうしたらいい？　何がある？」

「○○サークルはどんな感じ？」

「○○のバイトをしたいんだけど……」

「試験は難しい？　どれが難しい？」

など、多岐にわたりました。同郷の人がいて盛り上がったり、そこで知り合ってサークルに招いたりするなど、とても有意義な交流会となっています。

残念ながら、二〇一五年後期は二年生が忙しくなったため実施できていませんが、来年度には再開予定です。

告知用ポスター

ミーミー・ユー先生の特別講義

七月一日、アメリカ、テキサス大学サン・アントニオ校東アジア研究センターのミーミー・ユー先生をお招きして、特別授業を行いました。

ミーミー先生の特別講義は、テキサス大学サン・アントニオ校の紹介と、グローバル化時代の学生の教育と未来に関してのお話でした。

テキサス大学サン・アントニオ校の紹介

サン・アントニオ市は、テキサス州中南部の商業、金融、生物医学科学、米軍基地、米軍医学治療研究などの中心地で、多種多様な工業が発展しているところです。人口は約一五〇万人で、テキサスの第二都市、アメリカの第七都市になっています。ヒューストンから車で約三時間、そしてダラスから車で五時間、テキサスの首都のオースティンから車で一時間半しか離れていないところです。メキシコの近くにあり、多民族・多文化・多言語的な地域といわれています。ヒスパニック系アメリカ人が多いため、スペイン語を話す人も多くいます。メキシコ国境まで車でわずか三時間、アメリカ合衆国にいながら、メキシコの文化を楽しめる街でもあります。年間を通じてほとんどが晴れという天候にも恵まれ、全米や欧州から多くの観光客が訪れます。その上、西部開拓時代の雰囲気をも色濃く残し、一八三六年のテキサス独立戦争の史跡であるアラモ

砦や、近年特に人気が高いリバー・ウォークなどがあり、年間一千万人以上が訪れる全米有数の観光都市としても発展しています。日本ではまだ知られていないので、残念ながら日本人観光客の姿を目にするのはまれですが、陽気なヒスパニック系はとても親しみやすく、東海岸や西海岸とはまた違った魅力に溢れています。

アメリカのテキサス州には、たくさんの州立大学及び私立大学があります。テキサス大学サン・アントニオ校（ＵＴＳＡ）は、一九六九年にサン・アントニオ市に創立されました。八つの学部（人文社会学部、理学部、工学部、公共政策学部、建築学部、ビジネス学部、教育・人間発達学部、優等学部＝Honors College）と六十六の学部課程、五十二の修士課程、二十五の博士課程をもつ総合大学です。留学生に対しては、入学時の英語能力テストの結果に応じて、留学期間中の留学生用英語授業を提供しており、最低限資格に達していない場合には、ＵＴＳＡが特別集中英語課程を提供しています。

グローバル化時代の学生の教育と未来

学生たちと仕事をするというのは、自分の子どもが成長するのを見守るのと似ています。私の学生であったヴィンセントを初めて飛行機に乗せた時の感激をまだ覚えています。彼はそれまで飛行機に乗ったこともアメリカから出たこともなく、その時に初めてパスポートを手にしたのです。そんな彼が、いまでは韓国で英語を教え、もう三年がたつのです。韓国で教えながらの生活を気に入っており、この生活をもう少し続けたい、と彼は言っています。

私のもう一人の学生エリザベスは、決して豊かとはいえない家庭の子どもでした。彼女は、日本語と芸術の二科目を専攻しました。私の日本語クラスを受講していましたが、非常に勉強熱心な学生で、いつも優秀な成績を収めていました。彼女は「海外で勉強をしたい。でもお金がないから、無理だと思う」と私に言ったことがあります。私は、アメリカ教育省の海外留学奨学金に応募するようにと勧めました。彼女は、このような競争の激しい奨学金制度に応募するには、自分が力不足だと感じていたようです。しかし彼女は、非常に難関な二回の審査を経て、留学への切符を手に入れました。選考過程において、かの有名な東部海岸のアイビーリーグの学生たちにも引けを取らなかったのです。彼女は学費の全額支給を受け、京都の同志社大学で勉強するというチャンスを自分のものにしました。彼女は私の自慢です。

エリザベスは、この奨学金制度を利用し、二カ月間日本で過ごし、その後の日本語の勉強に役立てることができるようになったことを大変喜んでいました。再び日本に戻り、九州の水俣市で英語の先生をしています。今度は、日本政府が後援しているＪＥＴプログラムに応募したのです。ＪＥＴプログラムというのは、語学指導等を行う外国青年招致事業のことです。

私はこの三年間、大学の同僚のサポートをして、日本、韓国、台湾、香港で夏季海外留学プログラムの仕事をしていま

す。ヴィンセントとエリザベスのように、多くの学生が私たち海外留学支援グループの力を借りて、初めてパスポートを申請し、中には生まれて初めて乗る飛行機で海外に飛び立っています。

「井の中の蛙大海を知らず」という中国のことわざがあります。これは、小さな井戸の中に住む蛙は、大きな海があることを知らないという意から、物の見方や考えが狭いことを批判する場合に多く使われます。私の周りの若い人たちが、住み慣れた安住の地を飛び出し、国際的な活躍の機会を手にするのを見ていると、自分の努力が実を結んだと感じます。そして、このことが私の支えとなっています。私の大学にいる学生の多くは、家族の中で初めて大学で勉強した世代です。ですから、彼らの相談相手となり勇気づけ、もっと高く遠くへ飛び立たせることが〝絶対に必要〟なのです。私は、自分の学生が、アメリカを飛び立ち、ほかの国や文化を見てくることを望んでいます。私たち教師が高い期待を抱けば、学生たちは真価を発揮するのです。アメリカの著名なジャーナリスト、トーマス・フリードマンは、彼の著作『フラット化する世界』で次のように述べています。

私が子どものころ両親は、私に言いました。「食事を残してはいけない。中国とインドの人は飢えているのだ」。いま私は自分の娘に次のように言っています。「宿題をやり遂げなさい。中国とインドの人は仕事に飢えているのです」。

アメリカで航空券予約のために航空会社に電話をかけたり、PCのDellに技術サポートを依頼する電話をすると、インド人やフィリピン人の社員が応じてくれます。あなたのX線写真は、外国の医師に読まれているかもしれません。いまやアウトソーシングは、産業の大きな流れとなっているのです。

私たちの学生を競争力を持つ存在にするには、学生たちは世界で相対しているのは誰で、誰と競争しなければならないのかを知る必要があります。このような目標を心に秘めて、私は学生を指導しているのです。

今日私たちは、つながりを持った世界に住み、お互いに結び付いています。境界というのは地図上だけに存在するもので、マウスの一クリックで簡単にほかの世界に飛んで行ってしまいます。実際の境界というのは、私たち人間が作っているものなのです。お互いを知ろうとしない、お互いを理解しようとしないということから作られているのです。

私たちがお互いをより知ることができれば、世界はもっとよい場所になります。世界中の国々がもっと協力できるようになるといえます。

実践女子大学　生活文化フォーラム　第20号

平成28年3月10日発行

編集者　生活科学部生活文化学科
発行者　（ホームページ https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/）
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
TEL　042-585-8918
FAX　042-585-8919
実践女子大学ホームページ http://www.jissen.ac.jp

「編集企画」協力・印刷所
日野テクニカルサービス株式会社
〒191-8660　東京都日野市日野台3-1-1
TEL　042-586-5062
FAX　042-586-8944

実践女子大学　生活科学部生活文化学科
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8918　FAX 042-585-8919
https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/

表紙イラスト
生活文化学科 専任講師
作田 由衣子